三重県埋蔵文化財調査報告　150

窪田大垣内遺跡(第2次)発掘調査報告

――津市大里窪田町所在――

1997・3

三重県埋蔵文化財センター

序　　文

津は、古くから営々と文化を育んできた地域であり、これまでに多くの遺跡の存在が知られています。最近の発掘調査の成果を見ましても、この地域が重要な位置を占めていたことを証明しています。

窪田大垣内遺跡は、津市大里窪田町に所在します。大里窪田町周辺は、古くから人々の生活の場となっていたところです。平城京跡から出土した木簡に「久菩多里（くぼたり）」の名が見られ、８世紀初めには、この地域が国の行政組織の中に組み込まれていたことがわかります。また、近年の中勢道路建設にかかる発掘調査では六大Ａ遺跡で古墳時代の大規模な祭祀場と考えられる礫敷を持つ大溝が、平成５年度の窪田大垣内遺跡第１次調査では奈良時代の掘立柱建物などの遺構・遺物が多数確認されています。このことは、当時のこの地域には大きな権力を持った地域首長が存在した事実を窺わせます。

今回の窪田大垣内遺跡第２次調査では、本文中でも述べられておりますように鎌倉時代～室町時代を中心とする遺構・遺物を確認いたしました。特に井戸跡からは多数の墨書土器や木製品が出土し、中世の当地を研究する上で貴重な成果を上げることができたと考えております。

調査した場所は、残念ながら道路建設によって消滅します。生活を便利にするための道路建設も大変重要な事業です。しかし、その下には私たちの祖先が残してきた足跡があるわけで、その足跡なくして今日あるいは未来の発展はありえません。その意味からも、この成果を基に地域の方々、ひいては県民の方々にも文化財保護への関心を持って頂けるのであれば、これに勝る喜びはありません。

調査に際しましては、津市在住の皆様方、津市教育委員会をはじめ、県土木部の関係各位から、多大なご協力とともに暖かいご配慮を頂くことができました。調査の成果は、ひとえにこれらの方々の文化財保護への深いご理解のもとにあります。文末とはなりましたが、関係各位の誠意あるご対応に心からお礼を申し上げ、冒頭の挨拶といたします。

平成９年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　**奥　村　敏　夫**

例　　言

1．本書は三重県教育委員会が、三重県土木部から執行委任を受けて実施した主要地方道津関線県単道路改良事業に伴う窪田大垣内遺跡（旧称　大垣内遺跡）の第２次発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査は次の体制により実施した。

調査主体：三重県教育委員会

調査担当：三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

第二係長　杉谷政樹（調整）、主事　木野本和之、坂倉一光

研修員　岡　聡

調査協力：三重県土木部道路建設課　津土木事務所　津市教育委員会

地元各位

調査期間：平成８年５月７日～同年７月22日

3．本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行い、下記の者が補助した。執筆及び全体の編集は木野本が行い、写真は木野本・坂倉・岡が撮影した。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口　愛、楠木純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、冨楽幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、長谷いづみ、八田明美、浜崎佳代、早川陽子、松本春美、松月浩子、三谷朱美、森島公子、柳田敬子

4．報告書作成にあたっては、小林秀氏（博物館設立準備室）、榎村寛之氏（斎宮歴史博物館）のご教示を得た。

5．図版を作成するにあたっては国土調査法による第Ⅳ系座標を基準とし、方位は座標北を用いた。なお、磁針方位は西偏６°30′（平成元年）である。

6．写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

7．当報告書での用語は、以下の通り統一した。

つき …「坏」「杯」があるが、「杯」を用いた。

わん …「椀」「碗」等があるが、「椀」を用いた。

8．当報告書での遺構は、見た目の性格によって以下の略記号を付けた。

ＳＤ … 溝　　ＳＢ … 掘立柱建物　　ＳＫ … 土坑　　ＳＥ … 井戸

ＳＺ … 落ち込み等　　pit … ピット、柱穴

9．当発掘調査による図面・写真等の記録類並びに出土品は三重県埋蔵文化財センターに於いて保管している。

10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　　言 …… 1
　　1．調査の契機 …… 1
　　2．調査の経過 …… 1
　　3．調査の方法 …… 2
　　4．遺跡の名称について …… 2
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 3
　　1．位置 …… 3
　　2．歴史的環境 …… 3
Ⅲ　調査の成果 …… 7
　　1．基本層位及び地形 …… 7
　　2．遺構 …… 7
　　3．遺物 …… 15
Ⅳ　結　　語 …… 25
　　1．遺構について …… 25
　　2．墨書土器について …… 25
　　3．おわりに …… 26

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　遺跡地形図 …… 4
第３図　調査区位置図 …… 5
第４図　調査区土層断面図 …… 8
第５図　遺構平面図 …… 9～10
第６図　ＳＢ12実測図 …… 11
第７図　ＳＥ50実測図 …… 11
第８図　井戸実測図 …… 12
第９図　出土遺物実測図(1) …… 17
第10図　出土遺物実測図(2) …… 18
第11図　出土遺物実測図(3) …… 19
第12図　出土遺物実測図(4) …… 20

表　目　次

第１表　遺構一覧表(1) …… 13
第２表　遺構一覧表(2) …… 14
第３表　出土遺物観察表(1) …… 21
第４表　出土遺物観察表(2) …… 22
第５表　出土遺物観察表(3) …… 23
第６表　出土遺物観察表(4) …… 24

図　版　目　次

図版表紙　大里窪田町全景 …… 27
図版１　作業風景 …… 28
図版２　Ａ・Ｂ調査区全景　Ｃ地区全景 …… 29
図版３　ＳＢ10・ＳＤ１ …… 30
図版４　ＳＤ53・ＳＥ３ …… 31
図版５　ＳＥ30・ＳＥ52 …… 32
図版６　出土遺物(1) …… 33
図版７　出土遺物(2) …… 34
図版８　出土遺物(3) …… 35
図版９　出土遺物(4) …… 36
図版10　出土遺物(5) …… 37
図版11　出土遺物(6) …… 38

Ⅰ 前　言

1　調査の契機

主要地方道津関線は、鈴鹿郡関町と津市白塚町を結ぶ道路である。この道路は、江戸時代に参宮街道と東海道を結ぶ道として整備され、明治以降は「伊勢別街道」と呼ばれた。近年は、国道１号線と23号線の連絡路、津への通勤道路としての利用度が高い。そのため、大里窪田町地内・国道23号線と合流する津市白塚町周辺では朝夕の慢性的な交通渋滞が発生しており、その緩和の早急な実現が望まれていた。そこで、この渋滞の緩和を目的としたバイパスと、建設中の一般国道23号線中勢道路（中勢バイパス）へのアクセス道路の機能を兼ねた道路の建設が計画された。さらに、平成６年には三重県総合文化センターが開館し、周辺では県センター博物館・県公文書館・県立看護大学・人権啓発センター等の公共施設の建設・計画が進められおり、新道路は早期完成の必要に迫られていた。

このような状況のなか用地買収が完了し、平成８年度事業として未開通部分の工事着工の運びとなった。そのため、津市大里窪田町地内の埋蔵文化財調査が必要となったのである。

2　調査の経過

a　調査経過概要

平成５年度大垣内遺跡（第１次）の調査は、調査対象面積6,600㎡のうち買収済みの4,600㎡について実施した。調査の結果、奈良～平安時代の掘立柱建物跡等の遺構が検出され、ヘラ書き・墨書土器、円面硯、木製品等の遺物が出土した。

今回の第２次調査の対象となったのは、県道草生窪田津線との合流点で、用地未買収のため調査できなかった部分と津関線と交差する農道の地下道スロープ部分である。

発掘調査は平成８年５月７日から開始し、同年７月22日に終了した。最終的な調査面積は、1,800㎡であった。

調査期間中は、ちょうど梅雨の時期に重なり、降雨の度に調査区が水没し、その都度ポンプで排水を繰り返さなければならず、精神的にも疲労のたまりやすい調査であったように思う。しかし、作業員の皆さんの暖かいご配慮と熱心な意欲によって調査を無事終了することが出来た。ここに御芳名を記し、心からの御礼を申し上げたい。

後藤定男、後藤憲一、藤井正丸、立松明、柴田憲二馬場久昌、臼杵勝、高橋八重治、三鬼富夫、山本邦彦、沢野芳、辻カネ、藤井正子、藤井文子、宮村ヒサノ、草川ふさ子、木下三枝子、柴田節子、臼杵ノブ、清水こう、鈴木光子、草深ツタ子

b　調査日誌（抄）

4月17日　津土木事務所と事前協議（杉谷政樹・木野本和之・坂倉一光）。

5月７日　Ａ地区の表土掘削開始。山茶椀・瓦片等出土。

5月９日　道具の搬入。前日からの降雨で調査区が水没。排水に頭を悩ませる。

5月10日　農道地下道部分（Ｃ地区）の表土掘削開始。攪乱が多く、遺構の残り悪い。

5月13日　地下道部分の表土掘削完了。北側に流路跡を確認。Ａ地区の地区設定完了。

5月14日　作業員投入。Ａ地区北側から検出を開始。旧用水路底の礫中より重弧紋軒平瓦片出土。

5月18日　遺構検出の続き。Ａ地区の南側で地山を削った整地土を確認。地山はさらに下。

5月19日　整地土掘削。埴輪・須恵器・土師器等の破片が混じる。

5月24日　本日より遺構掘削開始。ＳＤ１より中世の遺物出土。

5月27日　ＳＤ１より天目茶碗、ＳＫ４より山茶椀山皿出土。Ｃ地区、遺構検出開始。

5月29日　Ｃ地区の旧流路より須恵器壺出土。奈良時代の遺物多い。

6月４日　Ｃ地区完掘。Ｂ地区表土掘削開始。ＳＤ・ＳＥを確認。

6月５日　Ｂ地区の表土掘削。県道側に遺構が多い。山茶椀・土師器鍋等の中世遺物が出土。

6月11日　連日の雨で、Ａ地区が水没。

6月12日　Ｂ地区の遺構検出開始。

6月19日　Ｂ地区中央の溝から遺物出土するが、時代は広範囲にわたる。

6月20日　午前中、県立翠ケ丘養護学校の生徒４名と引率教諭１名が現場見学。

6月25日　現場の状況悪く作業は午後から。溝から山茶椀等の遺物とともにスレートが出土。最近の埋め戻しと確信する。暑さのため作業能率上がらず。

6月27日　降雨のため土が重く、攪乱溝の掘削に苦労する。

7月２日　ＳＥ30から墨書山茶椀・漆塗りの木製椀・加工痕のある束状の自然木出土。

7月３日　Ｂ地区の掘削完了。清掃後、写真撮影。ＳＥ30から下駄・箸等の木製品出土。

7月５日　Ａ地区写真撮影のため朝から清掃。天候悪く、降雨のなか撮影完了。

7月10日　Ｂ地区の遺構実測開始。ＳＥの掘削を再開。ＳＥ30より墨書山茶椀・木製品出土。

7月11日　Ｂ地区の遺構実測続き（坂倉・岡聡・前川嘉宏・筒井正明）。

7月15日　作業員最終日。Ａ地区遺構実測開始。ベルコン・発電機の撤収完了。

7月16日　一身田小学校６年生児童 112名と引率教諭３名が現場見学。

7月17日　Ａ地区の平板測量（坂倉･岡･筒井）。ＳＥの断面実測。

7月18日　ＳＥ50重機による断ち割り。遺構実測図のコサック（坂倉・岡・船越重伸）。

7月19日　調査は本日ですべて終了。

7月22日　小屋・道具等を撤収。午後から津土木事務所に引き渡し。

3　調査の方法

a　小地区設定について

今回の調査では、調査区内を４ｍ四方の枡目で切ることによって小地区を設定した。南から数字、東からアルファベットを付け、枡目の南東隅の交点をその地区の符号とした。Ａ・Ｂ地区は、道路センター杭のラインを基準に、Ｃ地区については、地下道既設部分の国土座標と調査区北端に設けた杭を結ぶ基準線を４ｍ間隔で切ることによって小地区を設定した。なお、この小地区設定は国土座標軸とは無関係である。

b　遺構図面について

調査区の平面図は1／20で作成している。また、井戸などの遺物を伴うような遺構は、個別に1／10の実測図を作成したものもある。

c　文化財保護法等に関する諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。

・法第57条の３第１項（文化庁長官あて）
　平成８年４月23日付道建第 597号(県知事通知)

・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
　平成８年４月１日付教文第 205号(県教育長通知)

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（津警察署長あて）
　平成８年10月１日付教埋第 31-22号(県教育長通知)

4　遺跡の名称について

当遺跡は、主要地方道津関線県単道路改良工事の事業照会の回答を受けた当センターが、平成２年度に実施した分布調査によって新たに発見した。遺跡範囲は、津市大里窪田町字大垣内のほかに字池の下・平尾前まで広がるが、大部分を字大垣内が占めるため、第１次調査ではその名称を「大垣内遺跡」とした。しかし、津市内には高茶屋に同名の遺跡が存在すること、県内にも字「大垣内」が多数存在することから、単純に遺跡名に字名を冠することによって混乱を招く恐れがあると考えられた。そこで、第２次調査開始にあたり「窪田大垣内遺跡」と改称し以後これを使用する。

Ⅱ　位置と歴史的環境

1　位　置

津市は、三重県の北中部地域に広がる伊勢平野のほぼ中央部に位置する。東は伊勢湾を望み、北は安芸郡河芸町・鈴鹿市・亀山市、西は安芸郡芸濃町・美里村・安濃町、南は一志郡三雲村・香良洲町・久居市と接する。市の西部には丘陵地が広がり、海岸沿いの東部には志登茂川・安濃川・岩田川等の河川によって形成された沖積地が広がる。「津」の地名は、中世に最盛期を迎えた港町「安濃津」に由来する。[1] 安濃津は、博多津（現在の福岡市）・坊津（現在の鹿児島県）と並び「三津」といわれ中世の日本を代表する港町であったが、明応７(1498)年の地震と津波によって潰滅的な打撃を受けたと伝えられる。

窪田大垣内遺跡(1)は、津市大里窪田町字池ノ下・平尾前に所在し、志登茂川と安濃川に挟まれた丘陵から南東に派生する丘陵の東端部に位置し、標高は14～16mである。現況は水田・工場跡地であり、南東の毛無川の方向に緩やかに傾斜している。調査区の西には近世に造られた大沢池があり、周辺の水田の水甕として重要な役割を果たしている。なお、現在の窪田の集落は調査区の北東方向に位置し、この丘陵の北裾を走る県道津関線（通称伊勢別街道）沿いに東西に細長く連なっている。[2]

2　歴史的環境

近年の発掘調査の成果により、志登茂川流域の歴史は徐々に明らかになりつつある。特に大里窪田町地内では、一般国道23号線中勢道路建設・主要地方道津関線道路改良事業に伴う事前の発掘調査によって、当地の歴史を解明する上で重要な発見が相次いでいる。本来ならば志登茂川流域の歴史的環境を時代順に述べるべきであるが、ここでは「窪田」周辺を中心に述べたい。

第１図　遺跡位置図１:50,000（国土地理院「津東部」「津西部」「白子」「椋本」１:25,000より）

第2図　遺跡地形図　1：5,000（津市都市計画図1：2,500より）

旧石器時代～縄文時代

旧石器時代の遺跡は、現在のところ確認されていない。ただし、東浦遺跡(2)[3]から出土の木葉形尖頭器は、旧石器時代から縄文時代草創期のものであり、周辺に当該時期の遺跡が存在する可能性がある。縄文時代の遺跡としては、川北遺跡(3)[4]・睦合遺跡(4)などがあげられるが、後期の土器片が出土している程度であり顕著なものはなかった。しかし、大里西沖遺跡(5)[5]では中期末葉の竪穴住居が確認され、小谷C遺跡[6]からも中期の土器が出土している。

弥生時代

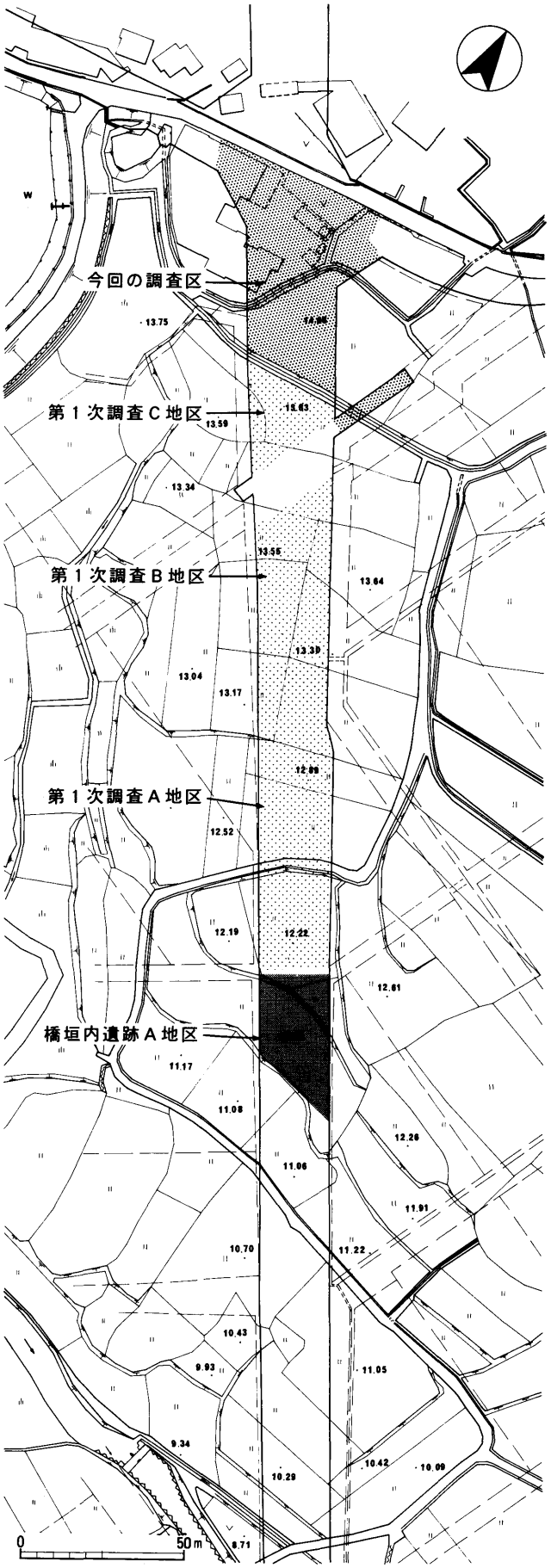
この時代に入ると、当地周辺の遺跡は急激に増加する。安濃川流域には、拠点集落である納所遺跡(6)[7]があり中期に最盛期を迎える。また、中期後半には見当山丘陵上に長遺跡(7)[8]が出現し、２００棟以上の竪穴住居を中心とする大集落が形成された。このような人々の活発な活動が展開された安濃川流域に比べると、志登茂川流域の遺跡の展開は顕著でなく、山田井遺跡(8)・向沖遺跡(9)などの後期の遺跡が知られている程度である。

古墳時代

この時代の遺跡では、川北遺跡や六大Ａ遺跡(10)[9]が注目される。川北遺跡からは、70棟以上の前期の竪穴住居が確認されている。六大Ａ遺跡では水辺の祭祀が行われていたことを示す遺構が確認され、そこからは初期須恵器・韓式系土器・祭祀用木製品・滑石製模造品などが大量に出土している。これは、当地に強力な地域首長が存在したこと、当時の伊勢地方に於いていち早く大陸文化を取り入れた地域であったことを示唆しており注目を集めている。

古代

古代律令制下、当地は奄芸郡に属した。平城宮出土の木簡に「久善多里」とあり、８世紀初頭には当地が律令国家の下部組織として、中央に組み込まれていたことが窺い知れる。窪田大垣内遺跡[10]・六大Ａ遺跡・六大Ｂ遺跡(11)[11]・橋垣内遺跡(12)[12]・安養院跡(13)[13]などの遺跡には、官衙的な建物と考えられる大型の掘建柱建物などの遺構や緑釉陶器・円面硯・獣足硯・和銅開珎・石帯などの遺物が確認されている。特に六大Ｂ遺跡では、多くの掘建柱建物が比較的規則性を持って建てられていたことが確認されており、当



第３図　調査区位置図　１：2,000

地が古代奄芸郡の中心として機能していたことは間違いない。

中世

この時期には、安濃川河口付近に形成された港町安濃津が最盛期を迎える。安濃津は、明応7(1498)年の大地震による津波で壊滅するまで、当時の太平洋沿岸における海運の中心的な都市であり「三津」のひとつに数えられた。平成8年(1996)年には、その一部が発掘調査され貴重な成果が得られた。[14]

中世には各地で荘園が形成され、窪田周辺一帯は窪田荘に比定されているものの、その成立時期については不明な点が多い。しかし、鎌倉時代には確実に存在しており、摂関家領であったことが確認されている。[15] また、窪田の北方には川北城跡(2)[16]があり、鎌倉時代の有力在地領主層の大規模な屋敷と考えられる遺構が確認されている。伊勢地方において、このような大規模な屋敷地が明確に確認されている所は他にない。このことからも、中世における当地も重要な位置にあったことが窺える。

中世後期には、北長野（現・美里村）に本拠を置く国人領主・長野工藤氏の領域内にあった。工藤氏は領域内各地に城館を築いており、窪田周辺には上津部田城(14)[17]・峯治城(15)[18]などがある。工藤氏は、安濃津にも触手を伸ばしており、15世紀中葉にはその代官職を一時的に神宮から横領するという事態も起こしている。[19] また、南伊勢を領域とする北畠氏とも再三対立するが、16世紀後半には北畠氏の支配下に入ったようである。しかし、永禄年間の織田信長の伊勢侵攻により織田氏に摂取され、信長の弟・信包を養子に迎えたことで、工藤氏の支配は事実上の終焉を迎える。

近世

その後、織田氏・富田氏の支配を経て、17世紀初頭の藤堂氏入部によって、幕藩体制下に置かれることとなる。窪田は、伊勢別街道が通過する交通の要衝となった。宿場が設けられ、伊勢参宮の人々で賑わいをみせた。現在も、街道沿いに古い民家や道中安全を祈る常夜燈が残り、往時の繁栄ぶりが偲ばれる。

＜註＞

1　伊藤裕偉『安濃津』(三重県埋蔵文化財センター、1997年)。
2　『大和街道・伊勢別街道・伊賀街道』（三重県教育委員会、1984年)。
3　小林秀「東浦遺跡」(『東浦遺跡・椋本南方遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター、1993年)。
4　萱室康光「川北遺跡・川北城址調査概要」(『三重の古文化』52、1984年)、萱室康光『川北城跡発掘調査概報』第1次調査（津市教育委員会、1981年)。
5　伊藤裕偉「大里西沖遺跡」(『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－』三重県埋蔵文化財センター、1992年)。
6　清水正明「小谷C遺跡」(『東浦遺跡・椋本南方遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター、1993年)。
7　伊藤久嗣ほか『納所遺跡』(三重県教育委員会、1980)。
8　池端清行「長遺跡」(『一般国道23号線中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅷ』、三重県埋蔵文化財センター、1996年)。
9　穂積裕昌ほか「六大A遺跡」(『一般国道23号線中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅷ』、三重県埋蔵文化財センター、1996年)。
10　平成5年度三重県埋蔵文化財センター調査。
11　村木一弥「六大B遺跡（B～F地区)」(『一般国道23号線中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター、1992年)。
12　平成4年度三重県埋蔵文化財センター調査。
13　萱室康光ほか『安養院跡発掘調査報告』（津市教育委員会、1990年)。
14　註1文献に同じ。
15　稲本紀昭「伊勢国における北条氏一門領」(『ふびと』38号、三重大学歴史研究会、1981年)。
16　註4文献に同じ。
17　萱室康光ほか『上津部田城址発掘調査報告』（津市教育委員会、1989年）ほか。
18　田中久生『峯治城跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1991年)。
19　伊藤裕偉「中世の港湾都市・安濃津に関する覚書」(『ふびと』49号、三重大学歴史研究会、1997年)。

Ⅲ　調査の成果

1　基本的層位及び地形

今回の調査地は標高14～16mの丘陵裾部分に相当する。全体が南の毛無川に向かってゆるやかに傾斜している。調査区は大きく3ヶ所に分かれている。ほぼ全面にわたって最近の改変を受けており、各調査区ごとの層位にも違いがある。基本的には表土直下が遺構検出面となる。

A地区　丘陵裾の現況水田部分。南に向かって緩やかに傾斜する。この部分は、かつての水田改良によって削平を受けており、基本的に耕作土直下は固い基盤層となる。一部には、丘陵側のレベルの高い部分の地山を削った整地土が確認された。

B地区　丘陵裾の一段高い部分。最近まで食品加工会社の工場用地であった。用地造成の際かなりの改変を受けており、この地区も基本的に整地土直下が遺構検出面となる。特に県道草生窪田津線に隣接する部分では、僅か数cmの表土直下で遺構が検出された。

C地区　県道津関線を横断する地下道スロープ部分。表面の砕石直下は分厚い盛土が1m以上ある。その下は旧用水路等による攪乱が大部分を占め、遺構の残りは悪かった。

A・B地区の境には、比高差約 1.5mの段差がある。調査の結果、A地区の北半部で遺構が全く確認されなかったことから、本来の丘陵裾部分は過去の開墾によりカットされたものと考えられる。

2　遺　構

今回の調査では、A・B地区においては鎌倉時代～室町時代を中心とした遺構を、C地区では奈良時代の流路跡を検出した。1で述べたとおり、最近の削平・攪乱が激しく、溝・井戸などの深く掘り込んだもの以外の遺構の残りは悪かった。この章では、各地区で検出された主なものについて記述する。なお、その他の検出遺構の概略については遺構一覧表（第1・2表）を参照されたい。

(1)　A地区の遺構

この地区で検出された遺構には、溝・土坑・井戸・掘立柱建物のほかにピットがある。以下にこの地区で検出された主な遺構の概略を記す。

溝ＳＤ1　幅約 0.6m、検出面からの深さは最深部で約 0.4m。調査区中央東寄りをほぼ南北に流れる。北端で分岐し、北に延びる溝はやや細くなる。この溝は南に向かうにつれ浅くなる。南端部では後世の開墾による削平を受け、幅が広くわずかに窪む程度となり調査区外に延びる。また、南端部では東西に流れる溝ＳＤ19と切り合っている。ＳＤ19との関係について精査したが、確認できなかった。しかし、ＳＤ1とＳＤ19はほぼ直角に交わる位置関係にあり、調査区南端部で合流するものと思われる。この埋土からは、15世紀中葉の土師器鍋・羽釜、天目茶椀等が出土している。

井戸ＳＥ2　調査区中央南寄りで検出した。掘形のプランはほぼ円形で、直径 1.3m、検出面からの深さ 2.9mの素掘り井戸である。固い岩盤を掘り抜いており、掘削後も一晩で1m程の水が溜まる状態であった。埋土上層からは、図示できなかったが木桶や、常滑産と思われる陶器の破片が出土している。

井戸ＳＥ3　ＳＥ2の北で検出した。南側は崩落によってやや膨らむが、掘形のプランはほぼ円形である。直径 1.6m、検出面からの深さ 2.6mの素掘り井戸である。この井戸も固い岩盤を掘り抜いており、掘削後もＳＥ2同様の状態であった。底には水溜め状の窪みがある。埋土中からは、鉄製のリング・石製の硯・15世紀中葉の土師器鍋片が出土している。

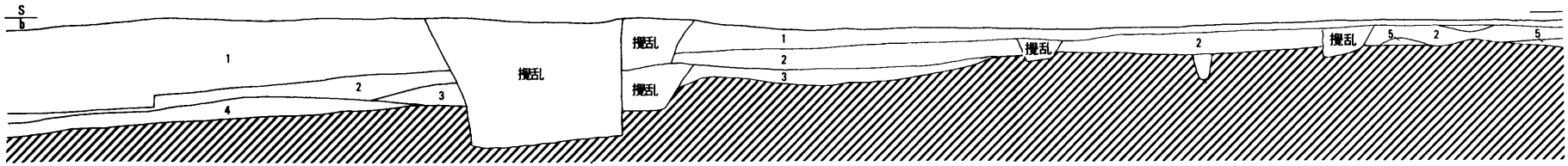
土坑ＳＫ4　調査区中央西寄りで検出した。直径2m、検出面からの深さ0.35mで、平面形が円形の土坑である。土坑の中には大量の円礫が投棄されていた。それらの礫とともに13世紀中葉の山茶椀の破片と山皿が出土している。

掘立柱建物ＳＢ10　調査区南東隅で確認した。東西2間以上、南北3間以上の規模で、柱間は東西が約2m、南北が約 2.2mである。大部分は調査区外に広がっており、全体の規模は不明である。ピットからの出土遺物はいずれも細片で厳密な時期は決定できないが、おそらく中世のものであろう。

溝ＳＤ19　幅約 0.6m、検出面からの深さ約 0.1

A地区西壁土層断面図

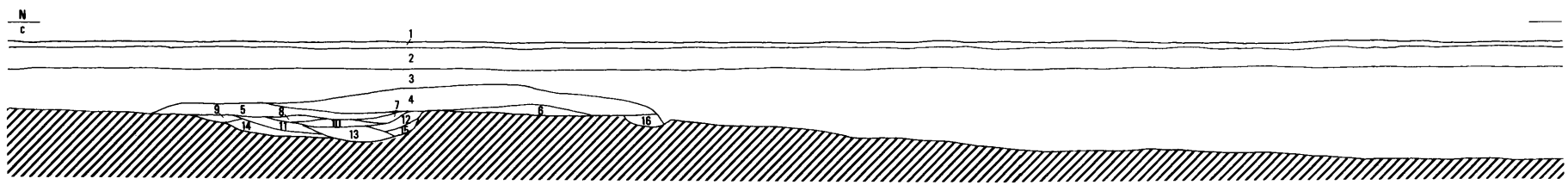
1　暗褐色土（耕作土）
2　明黄褐色土（整地土）
3　暗灰褐色土
4　明褐色土
5　3に地山ブロック含む
6　灰褐色土



B地区西壁土層断面図

1　盛土
2　淡褐色土（旧耕作土）
3　暗褐色土
4　褐色土
5　灰褐色土に明黄色粘土ブロック混入
6　明褐色土
7　明黄色粘土

0　5m



C地区東壁土層断面図

1　砕石
2　淡褐色土に砕石混入
3　明褐色土に礫混入
4　灰色土
5　褐色土
6　暗褐色土
7　褐色土に黄褐色土ブロック混入
8　灰白色砂に礫混入
9　7に同じ
10　黄褐色土
11　灰白色砂
12　灰褐色土
13　黄褐色砂に礫多く混入
14　7に同じ
15　7に同じ
16　黒褐色土

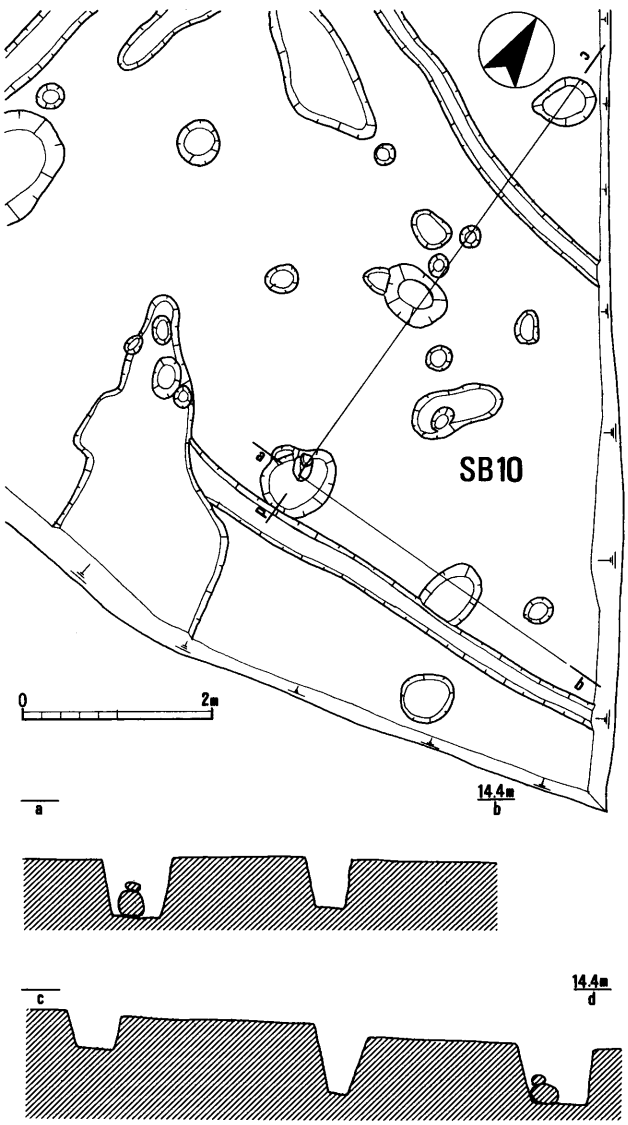
第4図　調査区土層断面図　1：100

第５図　遺構平面図 １：200

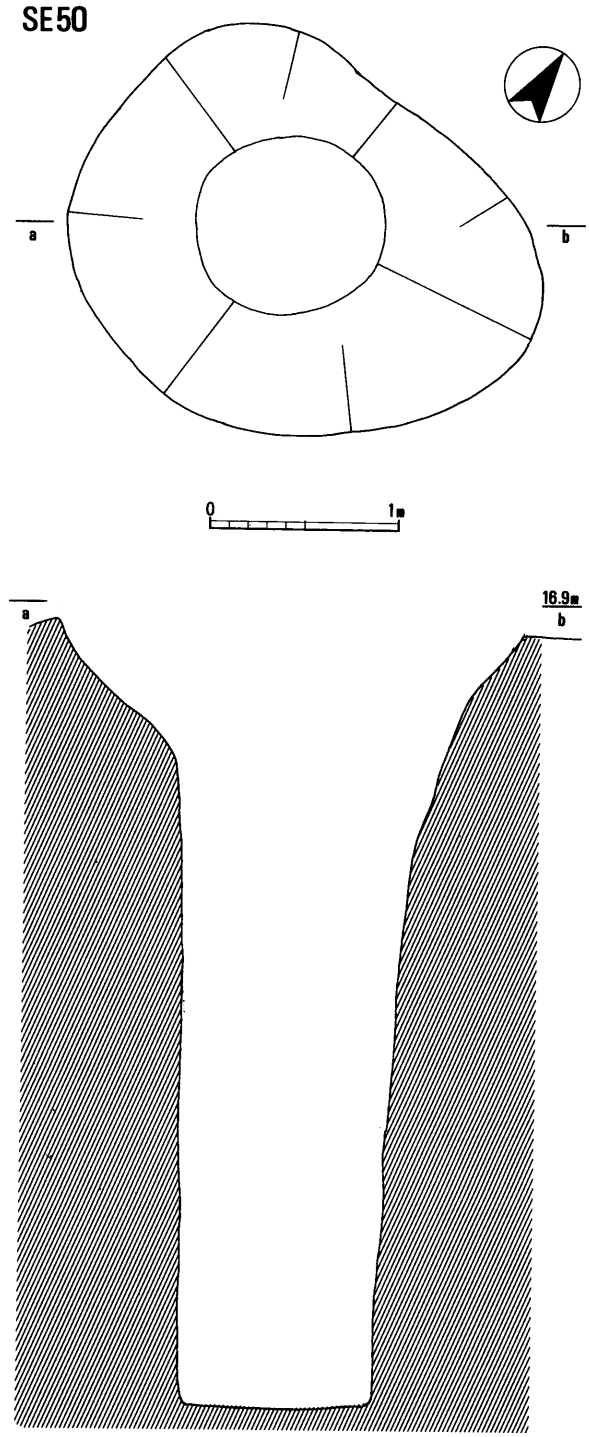
mの溝。調査区南端をほぼ東西に走り、東端はＳＤ１と合流する。水田開墾時にかなり削平を受けており、掘削するとわずか数cmで底に達した部分もあった。調査当時はＳＤ19と別個の溝と認識していたＳＤ26も、本報告書からは同一の溝とする。埋土からは、ＳＤ１と同じ15世紀中葉の土師器鍋・羽釜などが出土している。

溝ＳＤ29　Ｂ地区との境界近くで、幅約 0.5m、検出面からの深さ 0.3m、延長５mにわたって検出した。両端は途切れ、その実態は不明であるが調査のために撤去した農業用水路のルートとほぼ重なる形で存在したものと推察される。茶褐色粘土を主とする埋土からは、15世紀中葉の土師器鍋・羽釜が出土している。

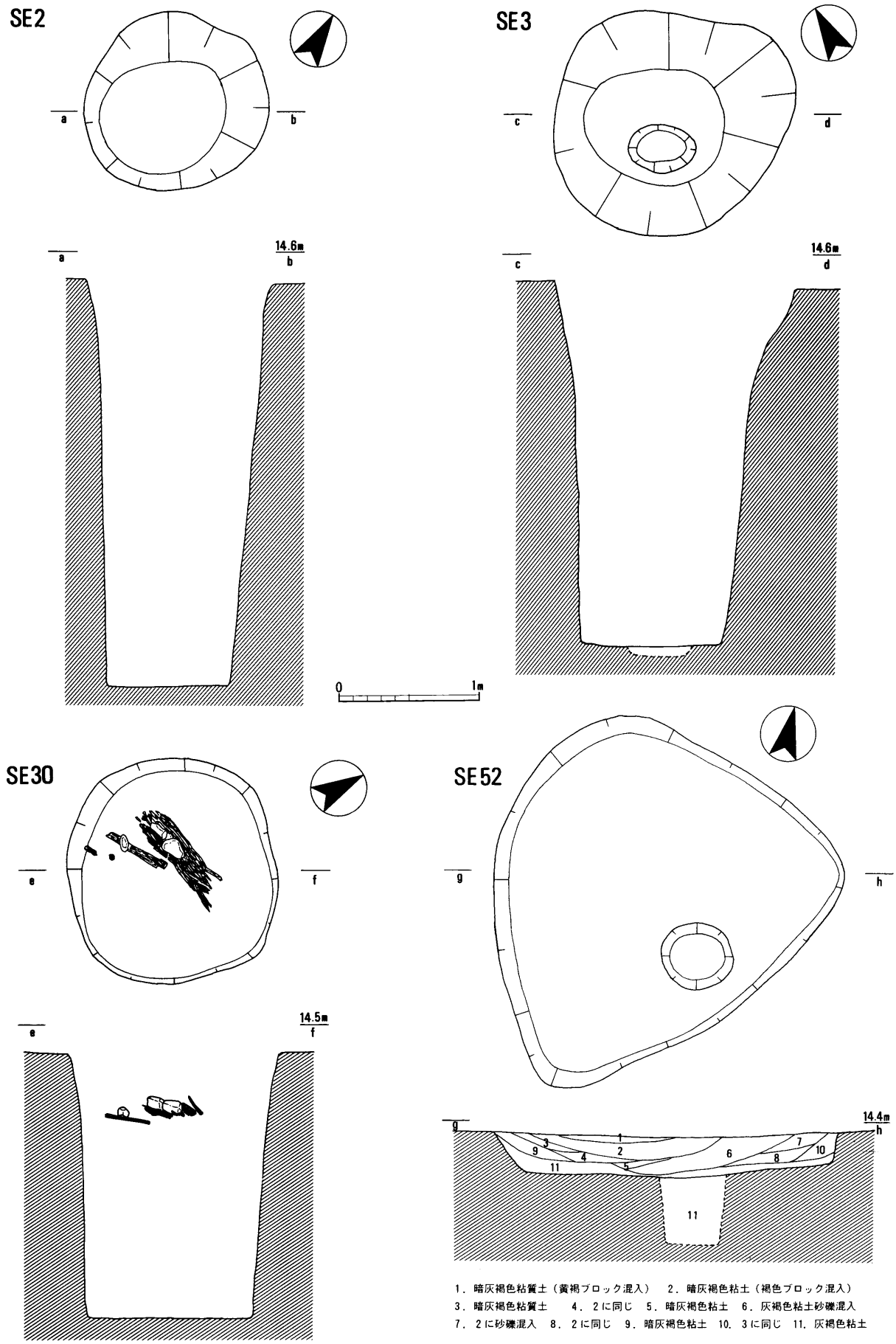
井戸ＳＥ30　Ａ地区北端部分で検出した。掘り形のプランはだ円形で、長径 1.6m、短径 1.5m、検出面からの深さ 1.9mの素掘り井戸である。この井戸からは、墨書のある13世紀後半の山茶椀・山皿が多数出土している。特に注目されるのは、「よねあり」と墨書されたものが複数出土していることである。その他にも墨痕の残る木簡・下駄・横櫛・漆椀・杓子・箸などの木製品が出土している。また、埋土上層からは先端を削った自然木が束状に出土している。



第６図　ＳＢ10実測図　１：40



第７図　ＳＥ50実測図　１：40



第8図　井戸実測図　1：40

遺構番号	性　格	時　期	小地区・現場記号	特　徴・形　状・計測数値など
ＳＤ１	溝	室　町	ａ５～ｄ２	調査区内延長19m、最大幅１ｍ。ＳＤ19と直行する。区画溝か。
ＳＥ２	井　戸	鎌　倉	ｃ３～ｄ３	素掘り。直径1.3m，深さ2.9m。
ＳＥ３	井　戸	室　町	ｃ４～ｃ５	素掘り。直径1.6m，深さ2.6m。
ＳＫ４	土　坑	鎌　倉	ｅ５	円形。
ＳＫ５	土　坑		ａ３～ｂ３	楕円形。
ＳＫ６	土　坑		ａ２～ｂ２	不定形。
ＳＫ７	土　坑	－	－	ＳＢ10の柱穴と判明したため抹消。
ＳＫ８	土　坑		ａ１	楕円形。
ＳＫ９	土　坑	－	－	ＳＢ10の柱穴と判明したため抹消。
ＳＢ10	掘建柱建物	室町？	ａ１～ｂ１，ａ２	東西２間以上、南北３間以上。調査区外に広がる。
ＳＤ11	溝		ａ２～ａ３，ｂ３	調査区内延長４ｍ。幅 0.2m。
ＳＤ12	溝		ａ１～ｂ１	調査区内延長５ｍ。幅 0.3m。ＳＫ14に切られる。
ＳＤ13	溝		ｂ２～ｂ３，ｃ２	ＳＤ18と切り合う。ほぼ並行関係。
ＳＫ14	土　坑		ｂ１～ｂ２	落ち込み状。不定形。
ＳＤ15	溝		ｃ３，ｄ２～ｄ３	延長４ｍ、幅 0.2m。
ＳＤ16	溝		ｃ２	延長２ｍ、幅 0.4m。ＳＤ１、ＳＤ13に切られる。
ＳＫ17	土　坑		ｂ２～ｂ３	溝に近い形状。
ＳＤ18	溝		ｂ２～ｃ２	ＳＤ13と切り合う。ほぼ並行関係。
ＳＤ19	溝	室　町	d2,e2,e3,f3,g4	削平を受け、僅かに窪む程度。ＳＤ１と直行する。区画溝か。
ＳＤ20	溝		ｇ４	延長３ｍ、幅 0.2m。ＳＤ19に切られる。
ＳＫ21	土　坑		ｇ４	不定形。ＳＤ19に切られる。
ＳＫ22	土　坑		ｃ２～ｄ２	不定形。落ち込み状。
ＳＫ23	土　坑		ｅ３～ｅ４	隅丸方形に近い。
ＳＥ24	井　戸		ｄ２	井戸であるが、途中何らかの理由で掘削を中止したものと思われる。
ＳＫ25	土　坑		ｃ２	円形か。ＳＤ13に切られる。
ＳＤ26	溝	室　町	ｄ２，ｅ２～ｅ３	ＳＤ19の続きと確認されたため抹消。
ＳＤ27	溝		ｆ３～ｆ４	延長２ｍ、幅 0.4m。
ＳＥ28	井　戸		ｆ４	井戸であるが、途中何らかの理由で掘削を中止したものと思われる。
ＳＤ29	溝	室　町	ｆ８	延長９ｍ、幅 0.5m。大沢池からの用水路と重なる。
ＳＥ30	井　戸	鎌　倉	ｃ10～ｃ11	素掘り。長径1.6m，短径1.5m，深さ1.9m。墨書土器、木製品多数。
ＳＤ31	溝		ｂ14～ｂ15	延長 6.5m、幅 0.5m。調査区外に延びる。
ＳＺ32	落ち込み	鎌　倉	ｄ16～ｅ16	落ち込み状。
ＳＫ33	土　坑	室　町	ｂ15	円形か。調査区外に広がる。
ＳＤ34	溝		ａ14～ｂ13	延長７ｍ、幅１ｍ。調査区外に延びる。
ＳＤ35	溝		ｃ16	延長 3.5m、幅 0.5m。調査区外に延びる。
ＳＫ36	土　坑		ｅ15～ｅ16	不定形。
ＳＫ37	土　坑	鎌　倉	ｃ15,16 ・ｄ15	方形。竪穴住居跡に似る。

第１表　遺構一覧表(1)

遺構番号	性　格	時　期	小地区・現場記号	特　徴・形　状・計測数値など
ＳＤ38	溝		d15	延長３ｍ、幅 0.3m。ＳＤ44に切られる。
ＳＤ39	溝	－	－	抹消。
ＳＤ40	溝	－	－	抹消。
ＳＤ41	溝		d15～d16	延長３ｍ、幅 0.3m。ＳＺ32、ＳＫ37に切られる。
ＳＤ42	溝		d15	延長３ｍ、幅 0.4m。ＳＤ44を切る。ＳＤ46と合流。
ＳＫ43	土　坑		d15	ＳＤ44に切られる。
ＳＤ44	溝	鎌　倉	d15～d16	Ｌ字型。ＳＤ38・41・42に切られる。
ＳＤ45	溝		d15，e14・15	延長４ｍ、幅 0.5m。ＳＤ44と直交。
ＳＤ46	溝		d14～d15	ＳＤ44と並行関係。
ＳＤ47	溝	－	－	ＳＤ44と同一の溝と判明し、抹消。
ＳＤ48	溝	－	－	抹消。
ＳＺ49	落ち込み	－	－	抹消。
ＳＥ50	井　戸	室　町	g12	素掘り。長径2.8m，短径1.9m，深さ4.2m。
ＳＫ51	土　坑	－	－	抹消。
ＳＥ52	井　戸	鎌　倉	b11	素掘り。長径2.6m，短径2.3m，深さ0.8m。削平のため浅い。
ＳＤ53	溝	鎌　倉	e12～14、f12～17、g14～16、h16・17、i16・17	二股に分かれる。幅約４ｍ.
ＳＤ54	流　路	奈　良	Ｃ地区北端部	北西～南東方向に流れる。

第２表　遺構一覧表(2)

井戸ＳＥ52　ＳＥ30の東側で検出した。掘形のプランは不定形で、平面形は台形状である。長径約 2.6ｍ、短径約 2.3m、検出面からの深さ 0.3mである。底の南寄りには深さ 0.5mの水溜状のピットがある。この部分も後世の削平を受けており、底の部分だけがかろうじて残ったものであろう。この井戸からは、「久」と墨書のある13世紀中葉の山茶椀・山皿などが出土している。

(2)　Ｂ地区の遺構

この地区では、井戸・土坑・溝・ピットを検出した。前述のようにＢ地区はかつての工場跡で、削平・攪乱が激しく遺構の残り具合は悪かった。以下にこの地区で検出された主な遺構の概略を記す。

井戸ＳＥ50　調査区西壁近くで検出した。掘形のプランは楕円形で、長径 2.8m、短径 1.9m、検出面からの深さ 4.2mである。途中までは人力で掘削したが、かなり深いことが予想されたため最終的には重機で断ち割った。底付近の埋土から曲物の破片が出土した以外には、15世紀代の土師器・陶器の細片が若干出土したのみである。

溝ＳＤ53　調査区の中央を北西から南東に延びる溝である。途中、北からの溝が合流する。赤褐色土に大礫が混入した非常に固い埋土で、上層にはスレート・コンクリート片・鉄筋なども混入していた。尾張型第６・７型式の山茶椀・山皿、青磁などの中世の遺物が出土したが、前述のような状況から攪乱溝と判断し、全面掘削は行わなかった。平成９年３月に実施した隣接地の試掘調査で、北から合流する溝の上流部と考えられる溝状の遺構が確認されたため、本書では溝として報告する。平成９年度には、隣接地の調査が予定されており、遺構の正しい性格付けはその結果を待ちたい。

(3)　Ｃ地区の遺構

この地区は、旧用水路の工事や地下道建設による攪乱が激しく、奈良時代の流路跡と若干のピットを検出したのみである。

流路跡ＳＤ54　調査区北端を横断する形で検出した。幅約３ｍ、検出面からの深さ 0.3ｍ。埋土からは、８世紀末の土師器高杯の脚柱部分、須恵器坏蓋・壺などが出土している。

3　遺　物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナバットに換算して54箱であった。

以下に、それぞれの遺物についての概略を記す。なお、各遺物の型式・編年観に関して山茶椀は藤澤良祐氏の、南伊勢系土師器は伊藤裕偉氏の見解に拠っている。[1] また、古瀬戸の編年に関しては「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～」[2] を参考にした。個々の遺物の詳細については、遺物観察表（第４表～第６表）を参照されたい。

(1)　土器類・金属類・石製品等

ＳＤ１出土遺物（１～８）

１は、南伊勢系の土師器皿。２は、古瀬戸後期の天目茶椀。３～６は土師器鍋、７は羽釜である。土師器はいずれも南伊勢系で、伊藤編年の第３段階ｃ型式に並行する。８は瓦質風炉で、透かし部分がわずかに残る。いずれも15世紀中葉頃のものである。

ＳＥ３出土遺物（10～13）

12は鉄製のリングであるが、その用途は不明である。一部肥厚する部分が接合部であると思われる。13は石製の硯である。一部が欠損しており、全長は不明である。中央部分は、度重なる使用によって窪んでいる。共伴する南伊勢系の土師器鍋は第３段階ｃ型式に並行することから、これらも15世紀中葉のものであろう。

ＳＫ４出土遺物（14・15）

14・15のみ出土した。15の底部には「久」と思われる墨書がある。いずれも藤澤編年の尾張型第６型式に相当し13世紀中葉のものである。

ＳＤ19・29出土遺物（16～21）

いずれも南伊勢系土師器の第４段階ｂ型式に並行するもので、15世紀中葉のものである。

ＳＥ30出土遺物（21～42）

22～27は、底部にひらがなで「よねあり」と墨書されている。22は山皿、23～26は山茶椀、27は破片で器種不明である。これらは、ほとんどが未使用のものである。26は、高台剥離後に墨書されている。28～33は、その他の墨書土器である。28は墨痕が非常に薄く不鮮明であるが、紋様のようである。29は「乙法師」。30は「士」あるいは「十一」。31は記号か。32は火にかけられたらしく、内外面に煤・炭化物が付着しており、墨書は不鮮明ではあるが「菊」と読める。33は、割れ目部分に僅かに墨痕が認められる。

その他にも、陶器・土師器・青磁・木製品類がまとまって出土している。34～39は山皿・山茶椀である。36も、32と同様に火にかけられた痕跡を残す。40・41は山茶椀質の片口鉢。42は常滑産の甕底部。43・44は南伊勢系土師器である。45～48は青磁椀である。いずれも破片であるが、蓮弁紋を削り出し後に施釉されており、龍泉窯系の輸入陶磁であろう。山皿・山茶椀は尾張片第６・７型式で、13世紀後半のものである。その他の土器類も、概ねその範疇に含まれよう。

ＳＥ52出土遺物（55～61）

55～60は、山皿・山茶椀である。そのうち、55～59はいずれも底部に墨書が認められる。55・56は、「久」と墨書されている。また、56の側面には紋様状の墨痕も認められる。57は「乙法師」か。58は底部破片のみ。薄い墨痕が認められるが、意味は不明である。59は「十」か。いずれも藤澤編年の尾張型第６型式に相当する。61は、内面に自然釉のかかる器種不明の須恵器の高台。ほかの遺物から見てイレギュラーであり、おそらく混入品であろう。61以外の遺物は、13世紀中葉のものである。

ＳＤ53出土遺物（62～82）

62～70・72～75は、藤澤編年第６・７型式に相当する山皿・山茶椀。71は灰釉陶器皿で、口縁部の一部を欠くが４方向に輪華をもつ。折戸53号様式に属し、10世紀中葉のものである。ほかの遺物から見てイレギュラーであり、おそらく混入品であろう。76～79は青磁椀。78・79は、蓮弁紋を削り出した後に施釉されており、龍泉窯系の輸入陶磁であろう。80は常滑産の壺。81は南伊勢系土師器鍋の第２段階に並行する。71を除き、13世紀後半のものである。82はガラス玉。調査区に隣接する丘陵上の管ケ谷古墳群からの流れ込みであろう。

ＳＤ54出土遺物（83～85）

83は須恵器坏蓋。84・85は須恵器長頸壺。84の頸

部下半から体部は完形、85は上半に２条の沈線を巡らす頸部のみ。これらは、８世紀末のものである。

Pit.出土遺物

86は、e-16Pit3・Pit9から出土した。古瀬戸後期の折縁深皿で、15世紀中葉のものである。

包含層出土遺物（87～100）

大部分が中世土器類である。しかし、若干の須恵器（94・95）・埴輪片（97）も出土している。これらも82同様に流れ込みか。96は瓦質火鉢片。焼成が不十分で、色調は赤味がかった肌色である。２条の凸帯の間に菊花条のスタンプを３個単位で押す。99は天目茶椀の高台を利用した加工円盤、 100は土錘である。

(2) 瓦類（101・102）

瓦類は、遺構検出中及びＳＥ30・52、ＳＤ53から出土している。ほとんどが破片で、図示できるものは少ない。

101は、重弧文軒平瓦の瓦当部である。表土掘削中に出土した。周辺の発掘調査でも古代瓦が出土していることから、周辺に古代寺院が存在したことを窺わせる。その特徴から７世紀後半のもので、津市で出土した瓦の中では最古の部類に入るものである。102はＳＥ52出土の丸瓦で、玉縁が僅かに残る。燻しがかかった表面は銀色味を帯び、凸面には縄叩痕、凹面には布目が認められる。共伴する土器から、13世紀中葉のものであろう。

(3) 木製品（103～109）

ＳＥ30からまとまって出土した。103は、加工部材。部分的に欠損しており、全長は不明である。端部に切り込みがあり、幅が狭くなった部分にほぼ正方形のほぞ穴を空ける。その横には、斜めに貫通する釘穴状の小穴がある。また、片面には幅約２㎝の溝状の窪みがある。井戸枠に使用されていた板の可能性がある。104・105は木簡。どちらも先端部側面に鋸歯状の刻みがある。104には、かすかに墨痕が認められる。106は横櫛。途中で折れており、歯も一部欠けている。全長は不明であるが、幅は約3.4㎝である。107は杓子。出土した時点では、７つに分裂していたが、ほぼ完全に復元できた。実測図の向かって右側の先端部側面は、度重なる使用によって磨滅している様子が観察できる。108・109は下駄。108はやや小振りで子ども用か。109は鼻緒穴の部分が欠損している。

この他にも、図示できなかったが漆器椀・箸・板片・先端に加工痕のある自然木が出土している。

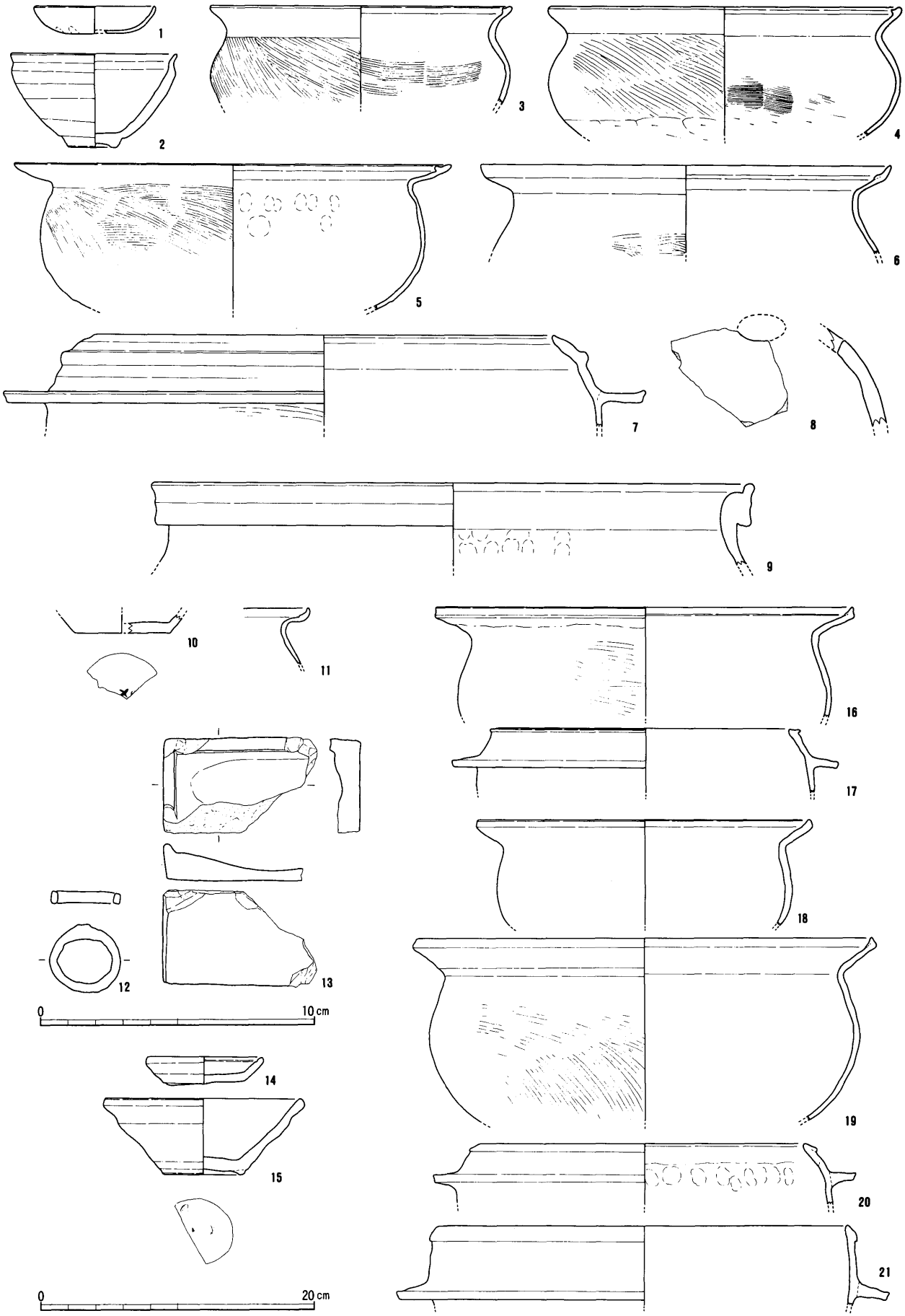
(4) その他の遺物

検出中・遺構掘削中に石鏃が出土した。おそらく縄文時代のものであろう。

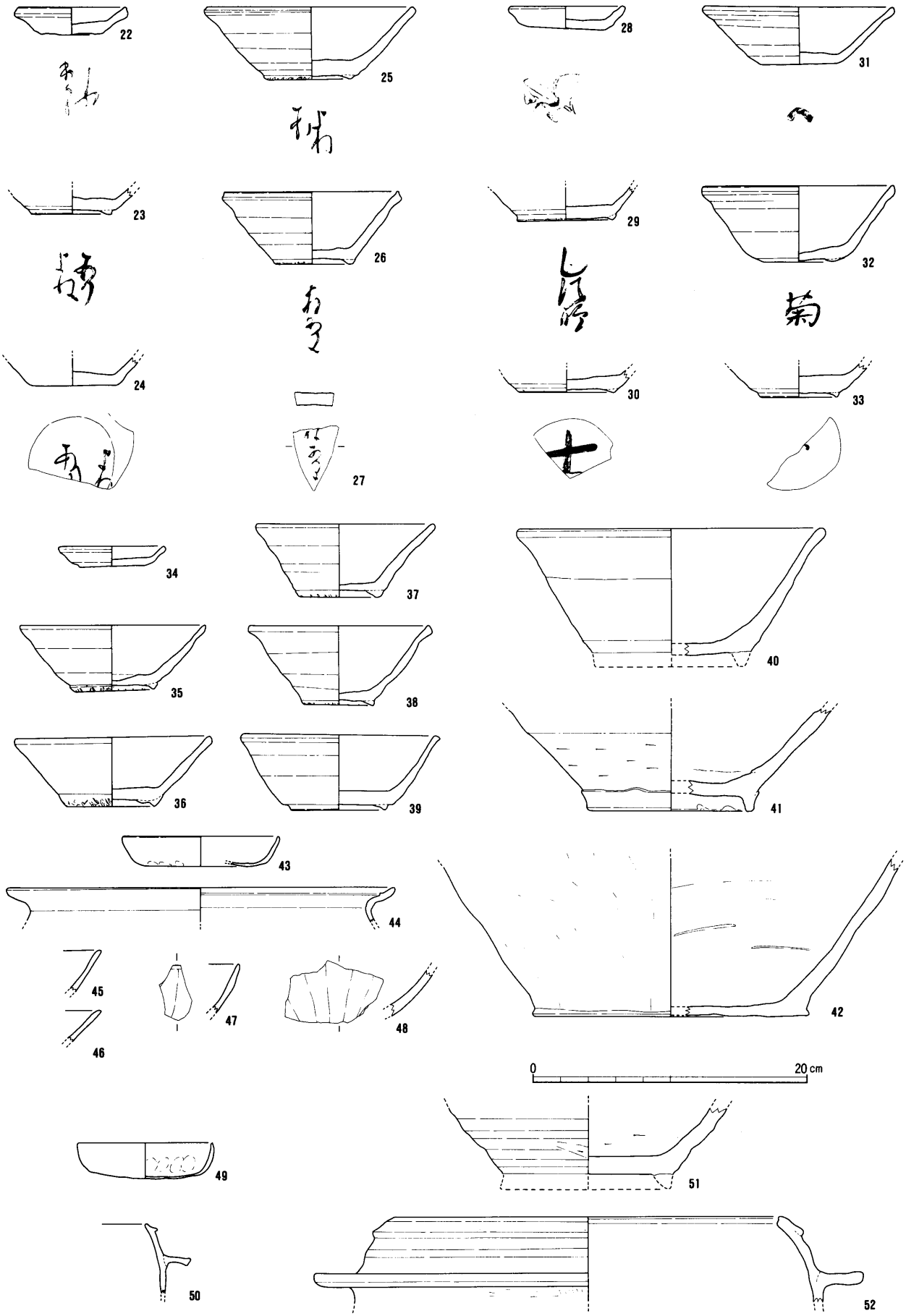
＜註＞

1　藤澤良祐「山茶椀研究の現状と課題」（『研究紀要』第３号、三重県埋蔵文化財センター、1994年）および伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』Vol.1 三重歴史文化研究会、1990年）。

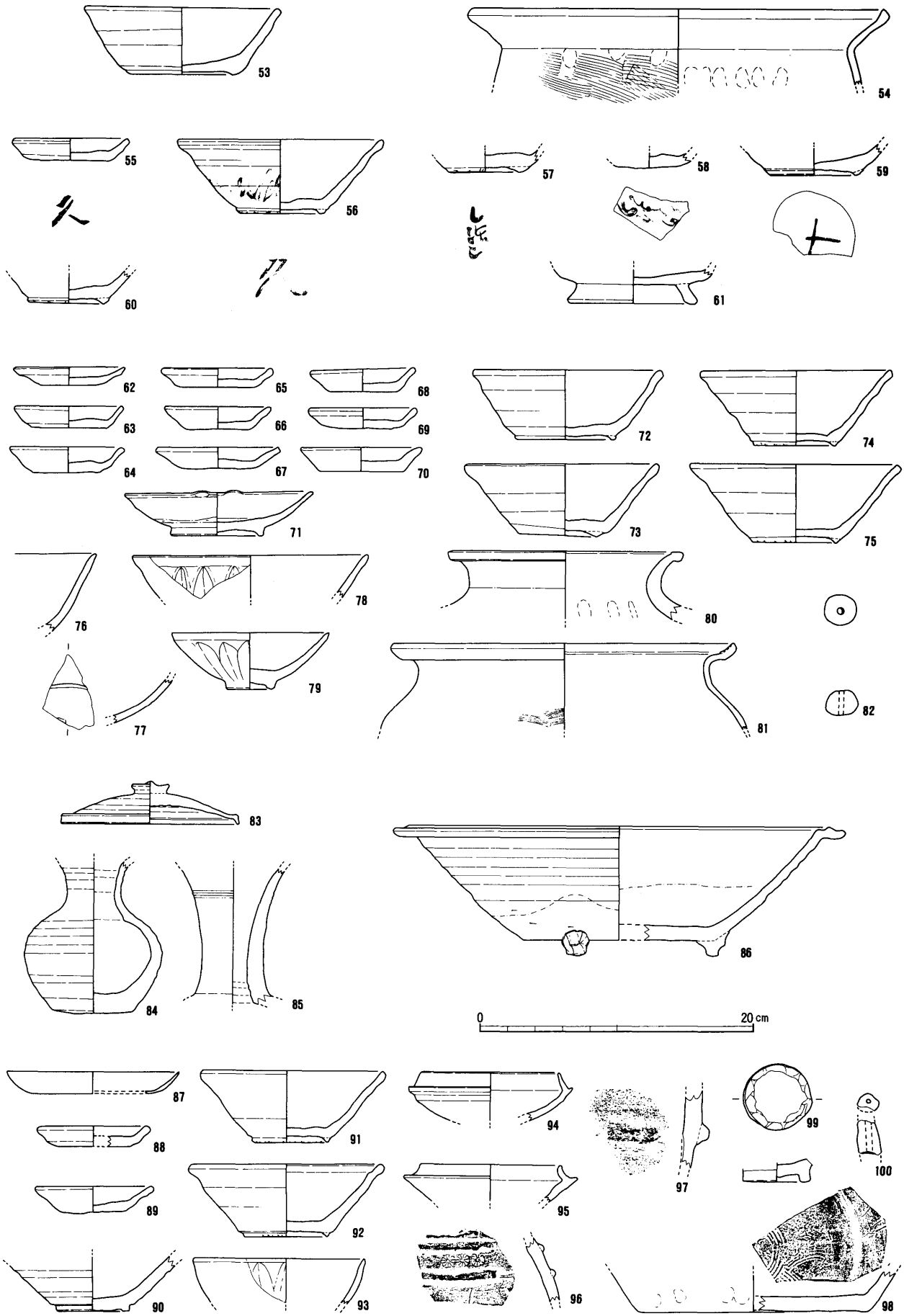
2　「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～」（財瀬戸市埋蔵文化財センター設立５周年記念シンポジウム資料集、瀬戸市教育委員会・財瀬戸市埋蔵文化財センター、1996年。）



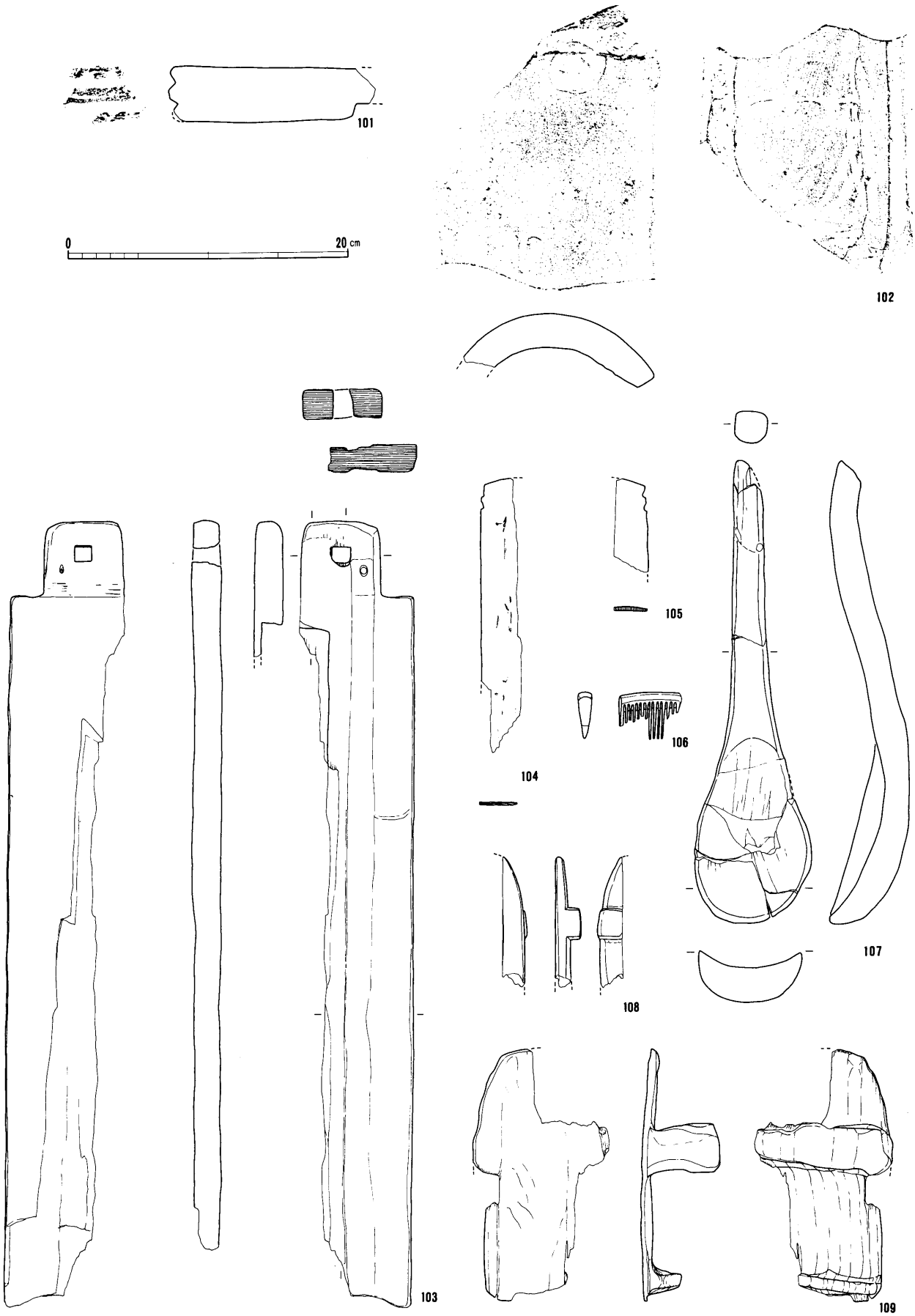
第９図　出土遺物実測図(1)　１：４（但し12、13は１：２）



第10図　出土遺物実測図(2)　1：4



第11図　出土遺物実測図(3)　1：4（但し82、は1：1）



第12図　出土遺物実測図(4)　1 : 4

No.	実測No.	器　種	遺構名	取り上げの時の名称	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色　調	残存度	備　考
1	029-07	土師器皿	SD 1	SD1	口：8.6 高：2.0	外：ナデ 内：ナデ	やや密	並	淡橙 灰白	口：1／4	南伊勢系
2	011-02	陶器椀	SD1	SD1	口：12.1 高：6.8	外：ロクロナデ、鉄釉、削出高台 内：ロクロナデ、鉄釉	やや密	良	黒 にぶい褐	口：1／3 底：完形	天目茶椀
3	032-02	土師器鍋	SD1	SD1	口：22.0	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデオサエ	粗	並	にぶい褐 灰白	口：1／4弱	南伊勢系 外面煤付着
4	014-01	土師器鍋	SD1	SD1	口：26.0	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、工具ナデ、ケズリ	やや粗	並	浅黄橙	小片	外面煤付着 南伊勢系
5	032-03	土師器鍋	SD 1	SD1	口：32.0	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデオサエ	粗	並	にぶい黄褐 浅黄橙	口：1／8強	南伊勢系
6	026-03	土師器鍋	SD1	SD1	口：30.0	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ	粗	並	浅黄橙 灰白	口：1／8	南伊勢系
7	015-01	土師器羽釜	SD1	SD1	口：33.5	外：ヨコナデ、鍔貼付後ナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	浅黄橙	口：1／4	南伊勢系
8	008-04	瓦質土器 風炉	SD1	SD1	不明	外：ナデ 内：ナデ	やや密	並	灰白 灰	小片	
9	030-02	陶器瓶	SE2	SE2	口：43.6	外：ナデ 内：ナデ、ナデオサエ	粗	並	灰褐 褐灰	口：1／8弱	常滑産
10	007-03	陶器椀	SE3	SE3	底：3.3	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	底：1／3	山茶椀 底部に墨書あり
11	029-06	土師器鍋	SE3	SE3	小片の為 口径不明	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ	やや粗	並	灰黄褐 にぶい黄褐	小片	
12	029-08	金属製リング	SE3	SE3	外径：2.6 内径：2.1	鉄製。接合部はやや膨らむ。				完存	
13	032-01	石製硯	SE3	SE3	残長：5.6 幅：3.5	中央部は、磨滅によって窪む。			上：黄灰 下：灰	2／3	
14	010-02	陶器皿	SK4	SK4	口：8.3 高：2.0	外：ロクロナデ、糸切痕、一部自然釉 内：ロクロナデ	粗	良	灰白	ほぼ完形	山皿
15	021-02	陶器椀	SK4	SK4	口：14.6 高：5.5	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	口：1／5底：1／3	山茶椀 底部墨書あるが不明瞭
16	020-02	土師器鍋	SD19	SD19	口：30.6	外：ヨコナデ、ハケメ、粘土接合痕 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	灰白	口：1／8	外面煤付着 南伊勢系
17	021-01	土師器羽釜	SD19	SD19	口：22.6	外：ヨコナデ、鍔貼付後ナデ 内：ヨコナデ	やや粗	並	灰白	口：1／8	南伊勢系
18	020-03	土師器鍋	SD29	SD29	口：24.5	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	灰白 淡橙	口：わずかに残る	外面煤付着 南伊勢系
19	013-01	土師器鍋	SD29	SD29	口：34.0	外：ヨコナデ、ハケ後ナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	浅黄橙	小片	外面煤付着 南伊勢系
20	001-01	土師器羽釜	SD29	SD29	口：25.5	外：ヨコナデ、鍔貼付後ナデ 内：ヨコナデ、オサエ	やや密	並	浅黄	口：3／4	外面煤付着 南伊勢系
21	020-01	土師器羽釜	SD29	SD29	口：31.5	外：ヨコナデ、鍔貼付後ナデ 内：ヨコナデ	やや粗	並	灰褐 灰白	口：1／7	南伊勢系
22	006-01	陶器皿	SE30	SE30	口：8.3 高：2.0	外：ロクロナデ、口縁部施釉、底部糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	ほぼ完存	山皿 底部墨書「よねあり」
23	006-02	陶器椀	SE30	SE30	台：6.0	外：ロクロナデ、貼付高台、籾殻痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	底部完存	山茶椀 底部墨書「よねあり」
24	007-02	陶器椀	SE30	SE30	台：6.3	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	底：2／3	山茶椀 底部墨書「よねあり」
25	004-04	陶器椀	SE30	SE30	口：15.3 高：5.2	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部糸切痕、籾殻痕 内：ロクロナデ、ナデ	粗	良	灰白	ほぼ完存	山茶椀 底部墨書「よねあり」
26	004-01	陶器椀	SE30	SE30	口：12.6 高：5.25	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部糸切痕、籾殻痕 内：ロクロナデ、ナデ	粗	良	灰白	ほぼ完存	山茶椀 底部墨書「よねあり」
27	024-04	陶器	SE30	SE30	不明	外：糸切痕 内：ナデ	やや密	並	灰白	底部破片	底部墨書「よねあり」
28	007-01	陶器皿	SE30	SE30	口：8.6 高：1.7	外：ロクロナデ、口縁部施釉、底部糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	口：7／8	山皿 底部墨書あるが判読できず
29	006-04	陶器椀	SE30	SE30	底：7.0	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	粗	灰白	底部ほぼ完存	山茶椀 底部墨書「乙法師」

第3表　出土遺物観察表(1)

No.	実測No.	器　種	遺構名	取上時名	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色　調	残存度	備　考
30	006-05	陶器椀	SE30	SE30	台：7.0	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰	底：1／3	山茶椀 底部墨書「士？」
31	004-02	陶器椀	SE30	SE30	口：12.7 高：4.0	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	良	灰白	ほぼ完存	山茶椀 歪み大 底部墨書
32	005-01	陶器椀	SE30	SE30	口：14.2 高：5.5	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	良	灰白	口：1／8底部完存	山茶椀 底部墨書「菊」
33	007-04	陶器椀	SE30	SE30	台：5.7	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	底：1／2	山茶椀 底部墨書あり
34	010-01	陶器皿	SE30	SE30	口：7.4 高：1.4	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ、施釉	粗	良	灰白 オリーブ灰	ほぼ完形	山皿
35	009-01	陶器椀	SE30	SE30	口:13.4 高：4.8	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部糸切痕、籾殻痕 内：ロクロナデ、ナデ、自然釉	やや密	良	灰白	口：2／3 底：完形	山茶椀 内面に墨付着
36	009-02	陶器椀	SE30	SE30	口：14 高：5	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部糸切痕、籾殻痕 内：ロクロナデ、自然釉	やや粗	並	黄灰 褐灰	口：3／4 底：1／2	山茶椀
37	027-02	陶器椀	SE30	SE30	口：13.0 高：5.4	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台に籾殻痕 内：ロクロナデ	粗	並	灰白	口：2／5	山茶椀
38	009-04	陶器椀	SE30	SE30	口：13 高：5.8	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部糸切痕、籾殻痕 内：ロクロナデ、ナデ、自然釉	粗	良	灰白	口：1／2 底：完形	山茶椀
39	027-01	陶器椀	SE30	SE30	口：14.4 高：5.3	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台 内：ロクロナデ	やや密	並	灰白	口：2／5	山茶椀
40	012-01	陶器片口鉢	SE30	SE30	口：22.5	ロクロナデ、高台貼付後ナデ、ナデ 内：ロクロナデ	やや密	並	灰白	口：1／3	外面に粘土接合痕
41	011-03	陶器片口鉢	SE30	SE30	底：12	外：ロクロナデ、ロクロケズリ、削り出し高台 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	底：1／3	内面に粘土接合痕
42	011-01	陶器鉢	SE30	SE30	底：20	外：ナデ、鉄釉底部：砂痕 内：ナデ、鉄釉	やや粗	並	褐灰 にぶい褐	底：2／3	
43	021-03	土師器皿	SE30	SE30	口：11.4 高：1.5	外：ヨコナデ、オサエ 内：ヨコナデ	やや粗	並	灰白	口：1／6	
44	025-01	土師器鍋	SE30	SE30	口：28	外：ヨコナデ内：ヨコナデ	粗	やや不良	明褐 灰黒褐	口：1／10	体部煤付着 南伊勢系
45	022-07	磁器椀	SE30	SE30	小片の為口径不明	外・内：ロクロナデ後施釉	密	並	明緑灰	小片	青磁 輸入陶磁
46	022-06	磁器椀	SE30	SE30	小片の為口径不明	外・内：ロクロナデ後施釉	密	並	オリーブ黄	小片	青磁 輸入陶磁
47	022-04	青磁椀	SE30	SE30	不明	外：ロクロナデ後施釉 内：ロクロナデ後施釉	密	並	灰白 明緑灰	小片	青磁 輸入陶磁
48	022-02	磁器椀	SE30	SE30	体部小片	外・内：ロクロナデ後施釉	密	並	灰オリーブ	小片	青磁 輸入陶磁
49	008-01	土師器皿	SZ32	SZ32	口：9.7 高：2.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、オサエ、ナデ	密	並	肌色	口：1／4	南伊勢系
50	029-05	土師器羽釜	SK33	SK33	小片の為口径不明	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ	やや密	並	灰白	小片	南伊勢系
51	027-04	陶器片口鉢	SK37	SK37	底：12.8	外：ロクロナデ、一部ケズリ 内：ケズリ	やや粗	並	灰白	底：1／3	山茶椀質 高台剥離痕あり
52	013-02	土師器羽釜	SD44	SD44	口：31.5	外：ヨコナデ、鍔貼付後ナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	粗	並	にぶい橙	口：1／8	外面煤付着 南伊勢系
53	027-05	陶器椀	SD44	SD44	口:14.0 高：4.9	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	口：3／4	山茶椀 渥美型
54	030-01	土師器鍋	SE50	SE50	口：30.0	外：ヨコナデ、ハケメ及びオサエ 内：ヨコナデ、オサエナデ	やや密	並	灰白	口：1／8	南伊勢系
55	005-02	陶器皿	SE52	SE52	口：8.4 高：1.65	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ、ナデ、重ね焼き痕	やや粗	良	灰白	口：7／8 底：完存	山皿 底部墨書「久」
56	004-03	陶器椀	SE52	SE52	口：15.0 底：5.45	外：高台貼付後ナデ、糸切痕、籾殻痕 内：ロクロナデ、ナデ（指圧痕）、自然釉	やや粗	良	明紫灰	口：1／4 底：2／3	山茶椀 底部墨書あり「久」 体部にも墨痕あるが判読不可能
57	007-05	陶器椀	SE52	SE52	台：5.5	外：高台貼付後ナデ、糸切痕、籾殻痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	底：ほぼ完存	山茶椀 底部墨書「乙法師」

第4表　出土遺物観察表(2)

No.	実測No.	器　種	遺構名	取上時の名称	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色　調	残存度	備　考
58	006-06	陶器椀	SE52	SE52	不明	外：糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	底：わずかに残る	墨痕あるが不鮮明
59	006-03	陶器椀	SE52	SE52	台：6.8	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	底：1／3	山茶椀 底部墨書あり「十？」
60	005-03	陶器椀	SE52	SE52	底：5.5	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台に籾殻痕 内：ロクロナデ	やや粗	良	灰白	底部完存	山茶椀
61	026-01	須恵器 器種不明	SE52	SE52	底：9.1	外：ロクロナデ、削り出し高台、施釉 内：ロクロナデ、施釉	粗	良	灰オリーブ	底：3／4	
62	028-02	陶器皿	SD53	攪乱溝	口：8.1 高：1.3	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ、自然釉	やや粗	並	灰白	口：7／8	山皿
63	028-04	陶器皿	SD53	攪乱溝	口：7.9 高：1.2	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	ほぼ完形	山皿
64	021-04	陶器皿	SD53	攪乱溝	口：8.4 高：1.9	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ、口縁部に施釉	やや粗	並	灰白 オリーブ灰	口：7／8	山皿
65	021-05	陶器皿	SD53	攪乱溝	口：8.2 高：1.4	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ、口縁部に施釉	やや粗	並	灰白 オリーブ灰	完存	山皿
66	029-01	陶器皿	SD53	攪乱溝	口：7.2 高：1.6	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ	粗	良	灰白	口：1／4	山皿
67	029-03	陶器皿	SD53	攪乱溝	口：8.8 高：1.5	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ	粗	良	灰白	口：1／4	山皿
68	028-05	陶器皿	SD53	攪乱溝	口：7.4 高：1.7	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	ほぼ完形	山皿
69	021-06	陶器皿	SD53	攪乱溝	口：8.0 高：1.55	外：ロクロナデ、糸切痕、施釉 内：ロクロナデ、施釉	やや粗	並	灰白	口：5／8	山皿
70	028-03	陶器皿	SD53	攪乱溝	口：8.3 高：1.8	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ、自然釉	やや密	並	灰白	ほぼ完形	山皿
71	012-02	陶器皿	SD53	攪乱溝	口：14.7 高：3.1	外：ロクロナデ、ロクロケズリ、ヨコナデ、漬けがけ釉5回 内：ロクロナデ、施釉、重ね焼き痕	密	並	浅黄 灰白	ほぼ完存	灰釉陶器皿 折戸53号様式
72	028-01	陶器椀	SD53	攪乱溝	口：14.5 高：5.2	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台 内：ロクロナデ、自然釉	やや粗	並	灰白	口：1／3	山茶椀
73	009-03	陶器椀	SD53	攪乱溝	口：13.7 高：5.2	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、糸切痕 内：ロクロナデ、ナデ	やや粗	良	灰白	口：1／4 底：1／2	山茶椀
74	027-03	陶器椀	SD53	攪乱溝	口：14.1 高：5.3	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台に籾殻痕 内：ロクロナデ	やや密	並	灰白	口：3／4	山茶椀
75	027-06	陶器椀	SD53	攪乱溝	口：15.5 高：5.7	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台に籾殻痕 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	口：1／2	山茶椀
76	024-03	磁器椀	SD53	攪乱溝	不明	外：ロクロナデ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	オリーブ灰	小片	青磁 輸入陶磁
77	022-03	磁器椀	SD53	攪乱溝	不明	外：ロクロナデ、沈線、施釉 内：ロクロナデ	密	並	灰白	小片	青磁 輸入陶磁
78	022-01	磁器椀	SD53	攪乱溝	口：17.1	外：ロクロナデ、蓮弁紋削り出し、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	並	明緑灰	口：1／8	青磁 輸入陶磁
79	023-03	磁器椀	SD53	攪乱溝	口：11.5 高：4.15	外：ロクロナデ、蓮弁紋削り出し、削り出し高台、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	明緑灰	口：1／6 底：1／2	青磁 輸入陶磁
80	029-04	陶器壷	SD53	攪乱溝	口：15.6	外・内：オサエ・ナデ後施釉	密	良	灰白 オリーブ黒	口：1／4	常滑産
81	026-02	土師器鍋	SD53	攪乱溝	口：24.8	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ	粗	不良	浅黄橙 浅黄	口：1／4	南伊勢系
82	025-03	ガラス玉	SD53	攪乱溝	高：0.5 幅：0.6 重：0.19	―	―	―	青緑	完形	他所からの混入
83	019-01	須恵器杯蓋	SD54	SD101	口：12.8 高：3.2 摘高：2.6	外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密	並	灰白	1／3	
84	019-02	須恵器壷	SD54	SD101	底：5.7	外：ロクロケズリ、ナデ 内：ロクロナデ	やや密	並	黄灰	底部完存	
85	019-03	須恵器壷	SD54	SD101	頸長:9.0	外：ロクロナデ、沈線 内：ロクロナデ	やや密	並	灰白	頸部のみ	

第5表　出土遺物観察表(3)

No.	実測No.	器　種	遺構名	取り上げの時の名称	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色　調	残存度	備　考
86	012-03	陶器皿	e16 p.3 p.9	e16 p.3 p.9	口：33.3 高：9.3	外：ロクロナデ、回転ヘラ切り、貼付脚3 内：ロクロナデ、ハケ塗り（灰釉）	密	並	浅黄 淡黄	口：1／6	折縁深皿
87	024-06	土師器皿	検出中	検出中	口：12.6 高：1.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	並	浅黄橙	口：1／4	
88	029-02	陶器皿	表土掘削	表土掘削	口：7.6 高：1.5	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ	やや密	良	灰白	口：3／8	山皿
89	023-06	陶器皿	表土掘削	表土掘削	口：8.8 高：1.9	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ、施釉	粗	良	灰白 オリーブ灰	口：1／2	
90	023-05	陶器椀	表土掘削	表土掘削	底：5.2	外：ロクロナデ、削り出し高台 内：ロクロナデ後施釉	やや密	良	灰白 にぶい黄橙	底：1／2	古瀬戸後期
91	010-03	陶器椀	表土掘削	表土掘削	口：13.1 高：5.3	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、糸切痕、籾殻痕 内：ロクロナデ、ナデ、若干の自然釉	粗	並	灰白	口：1／8	山茶椀
92	023-02	陶器椀	攪乱 土坑	SK1	口：13.8 高：5.3	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、糸切痕、籾殻痕 内：ロクロナデ、ナデ、若干の自然釉	やや密	並	灰白	口：1／8	山茶椀
93	023-04	磁器椀	表土掘削	表土掘削	口：13.3	外：ロクロナデ、蓮弁紋削出後施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	明緑灰 灰白	口：1／16	青磁 輸入陶磁
94	024-05	須恵器杯身	表土掘削	表土掘削	口：10	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗	並	灰白 灰	口：1／4	
95	024-01	須恵器杯身	表土掘削	表土掘削	口：10.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白 明青灰	口：1／6	
96	008-03	瓦質土器 火鉢	検出中	検出中	—	外：ナデ、貼付凸帯、花状スタンプ 内：ナデ	やや密	並	浅黄橙	小片	
97	022-05	円筒埴輪	表土掘削	表土掘削	—	外：ナデ、貼付凸帯 内：ナデ	やや粗	並	浅黄橙	小片	他所からの混入
98	008-02	陶器鉢	表土掘削	表土掘削	底：16.8	外：ロクロナデ、ケズリ 内：ロクロナデ	やや密	並	浅黄橙	底：1／7	
99	024-02	磁器椀	表土掘削	表土掘削	底：4.2	外：ナデ、削出高台 内：ロクロナデ、施釉	やや密	並	灰黄 赤黒	高台部分完形	加工円盤
100	025-02	土師器土錘	検出中	検出中	残長：2.5 径:1.8	外：ナデ	やや密	並	浅黄橙	小片	
101	002-01	軒平瓦	表土掘削	表土掘削	長：14.5 厚：4.0	磨滅激しく、調整不明瞭。瓦当部に重弧文が僅かに残る。	粗	不良	にぶい橙灰	破片	7世紀後半
102	003-01	丸瓦	SE52	SE52	長：20.5 幅：16.2 厚：2.4	凸面：ヘラケズリ、縄叩目、燻し 凹面：布目、縄目、燻し	並	良	暗灰	破片	玉縁部僅かに残る。保存状態良好。
103	033-01	加工部材	SE30	SE30	残長：56 幅：8.1 厚：2.2	端部に臍穴。片面に、幅2cmの溝状窪みあり。	—	—	—	破片	井戸枠部材の可能性あり。
104	035-01	木簡	SE30	SE30	残長：20 残幅：3.0 厚：0.3	端部に鋸状の刻目あり。片面に墨痕あるが不鮮明で判読出来ず。	—	—	—	破片	祭祀関係か。 スギ
105	035-02	木簡	SE30	SE30	残長：6.5 残幅：2.5 厚：0.4	端部に鋸状の刻目あり。	—	—	—	破片	祭祀関係か。 ヒノキ
106	035-04	横櫛	SE30	SE30	残長：4.5 残幅：3.3 厚：0.9	端部に鋸状の刻目あり。	—	—	—	破片	イスノキ
107	036-01	杓子	SE30	SE30	全長： 杓幅： 柄幅：	杓の柄から見て左側面の磨滅が激しい。右利きの人間が使用していた。	—	—	—	ほぼ完存	クロマツ
108	035-03	下駄	SE30	SE30	残長：9.7 残幅：1.8	109に比べやや小振り。僅かに鼻緒の穴が残る。子ども用か。	—	—	—	破片	
109	034-01	下駄	SE30	SE30	残長:18.0 幅：8.4	前の歯はほぼ完存。後ろは若干残るのみ。鼻緒の穴の部分が割れる。	—	—	—	2／3	コウヤマキ

第6表　出土遺物観察表(4)

Ⅳ 結　語

今回の調査では、鎌倉時代～室町時代を中心とする遺構・遺物が確認された。最後に本報告書のまとめとして、今回の調査で明らかになったことについて若干の考察を行いたい。

1　遺構について

前述のように、今回の調査区の遺構の残りは悪く、明確に確認できたのは井戸等の深く掘り込まれた遺構に限られた。井戸は、掘削途中で放棄されたと考えられるものも含めて７基が確認された。その内、ＳＥ30・52からは藤澤編年第６・７形式の山茶椀が出土していることから、13世紀中頃の範疇に入るものと考えられる。その他は、出土した土器片の口縁部等の特徴から14～16世紀の範疇におさまるものであろう。いずれも固い粘土質の基盤層を掘り抜いた素掘りの井戸で、石組み等は確認できなかった。底部には、一部水溜状の窪みが確認されたが、曲物等の施設は確認できなかった。宇野隆夫氏の分類のＡⅠ類に相当するものであろう。[1] この周辺は丘陵裾部分で、もともと水利の悪い所であった。現在も、丘陵間に入り込んだ谷を堰止めた溜池が各所に見られる。調査区周辺にも大沢池・嘉間池等の、近世に造られた大規模な溜池がある。なお、調査終了後に実施された本年度調査区西側の試掘調査の結果、ＳＤ53の上流部にあたる溝状の遺構が確認され、この谷の奥に溜池等の灌漑施設が設置されていた可能性を示唆している。

また、明確な建物跡は１棟の確認に止まったが、ほぼ東西、南北に走る溝と、それに囲まれるように存在するピットの存在は、この丘陵裾に中世集落が展開していたことを示唆している。第１次調査のＣ地区、[2] 隣接する安養院跡[3]でも中世の遺構・遺物が確認されており、今回の調査はそれを更に裏付ける結果となった。なお、現在の窪田集落は伊勢別街道沿いに立地しており、近世にこの街道ルートが成立したことによって集落の中心が移動していったと考えることもできよう。ただし、中世の街道ルートが明らかになっていない現状では多くを語れない。

2　墨書土器について

最後に、ＳＥ30出土の墨書土器について若干の考察を行いたい。

これまでに県内各地の遺跡から、多数の墨書土器の出土が報告されており、考古資料における数少ない貴重な文字資料であることは異論のないところである。県内出土の中世における墨書土器については、小林秀氏が整理と類型化を試みておられる。[4] これによると、県内出土の中世の墨書土器は圧倒的に山茶椀が多く、しかも墨書位置については大多数が底部外面であり、これらは墨書の持つ意味と深い関係にある可能性が高い。また、墨書のパターンも「文字」「記号」「花押」「絵」の大きく４つに分類できるとされている。その内「文字」については、更に(1)人名、(2)数字、(3)物品、(4)身分的なものの４つに分類できるとされている。

今回出土したものの内、ＳＥ30から「よねあり」と書かれたものが６点ある。県内出土の墨書土器で類例を探した結果、蚊山遺跡左郡地区[5]・宮間戸遺跡[6]・宮ノ前遺跡[7]などから「よね」と書かれたものが出土しているが、「よねあり」については出土例はない。「よね」については、小坂宜広氏によって人名説は否定され、「よね＝米」として計量升代用の可能性が示唆されている。[8] ＳＥ30から出土したものの大半が山茶椀であるが、山皿に書かれたものもある。また、「よねあり」と書かれているため、単に米という物品を示したり計量升の代用として使用された可能性は低い。前述の小坂氏の鎌倉時代の人名ではないとの論考もあるが、現在でも姓・名を略号的に使用する例がある。中世文書の中でもこのような使用例があり、仮に米田・米山等の「米」のつく苗字が鎌倉時代まで遡るのであれば姓名の略の可能性も考えられる。[9]

ここで、「よねあり」の山茶椀類がＳＥ30という特定の遺構から集中出土したこと、ほとんどが未使用品であることに注目したい。山茶椀類は、日常頻繁に使用された器であり、通常は内面に使用痕が認められる。しかし、「よねあり」と墨書された山茶椀類

は未使用品で使用痕が認められない。このことは、これらが日常生活で使用されていなかったという有力な証拠となる。また、これまでの各地の調査で井戸から出土した墨書土器には、何らかの祭祀的・呪術的意味を持つものが多く含まれることは周知の事実である。そこで、「よねあり」が祭祀的・呪術的意味を持つと仮説をたててみたい。それは、豊作を祈る祭としての「よねあり」である。「よね」は、南伊勢地方の当時の田畠売券に「米」を意味する語として散見されており、これは「米」と考えて間違いないであろう。では、「あり」はどうであろうか。「あり」＝「在り」ならば、器のなかに米があるという意味になる。また、「あり」＝「有り」ならば「富む」という意味がある。したがって、仮に後者を採れば、その年の豊作を祈念して「よねあり」と墨書した山茶椀類を井戸に投棄する祭祀が存在したと仮定することもできる。しかし、他に出土例がなく情報量が限定されている状況であり、多くを語ることはできない。今後の調査による類例の増加と多方面からの研究の進展を待ちたい。

3　おわりに

以上、窪田大垣内遺跡の調査によって得られたことを述べてきた。大きくは、当地を含む丘陵裾部分に中世の集落が営まれていたということである。

最後に、今回の調査で得た反省点について少し述べておきたい。調査当時、本書で報告したＳＤ53については瓦礫等が多く混入しており、調査地が工場跡であったため近・現代の攪乱による落ち込みと考えて全面掘削は行わなかった。しかし、本調査後に実施された隣接地の試掘調査によって、その続きと思われる溝が確認されたことによって、今回の報告内容に変更することとなった。これは、ひとえに担当者の検討が不十分であったことに起因する。このことを、今後の教訓としたい。

次年度には、県道草生窪田津線を挟んで西側の部分の調査が予定されている。この調査によって、今回の成果を上回るような新たな成果が上がることを期待する。

＜註＞

1　宇野隆夫「井戸考」（『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』、真陽社、1989年）。

2　「大垣内遺跡発掘調査概要」（三重県埋蔵文化財センター、1992年）。

3　萱室康光ほか『安養院跡発掘調査報告』（津市教育委員会、1990年）。

4　小林秀「中世における三重出土の墨書土器について」（三重歴史文化研究会資料、1997年）。

5　前川嘉宏ほか『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告－第６分冊－』（三重県埋蔵文化財センター、1993年）。

6　中村信裕「宮間戸遺跡」（『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1983年）。

7　本堂弘之ほか「宮ノ前遺跡」（『一般国道23号線中勢道路建設事業に伴う大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1995年）。

8　小坂宜広「Ⅵ　蚊山遺跡」（『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』三重県埋蔵文化財センター、1990年）。

9　伊藤裕偉氏のご教示による。

図　版

大里窪田町全景（東上空から）

図版 1

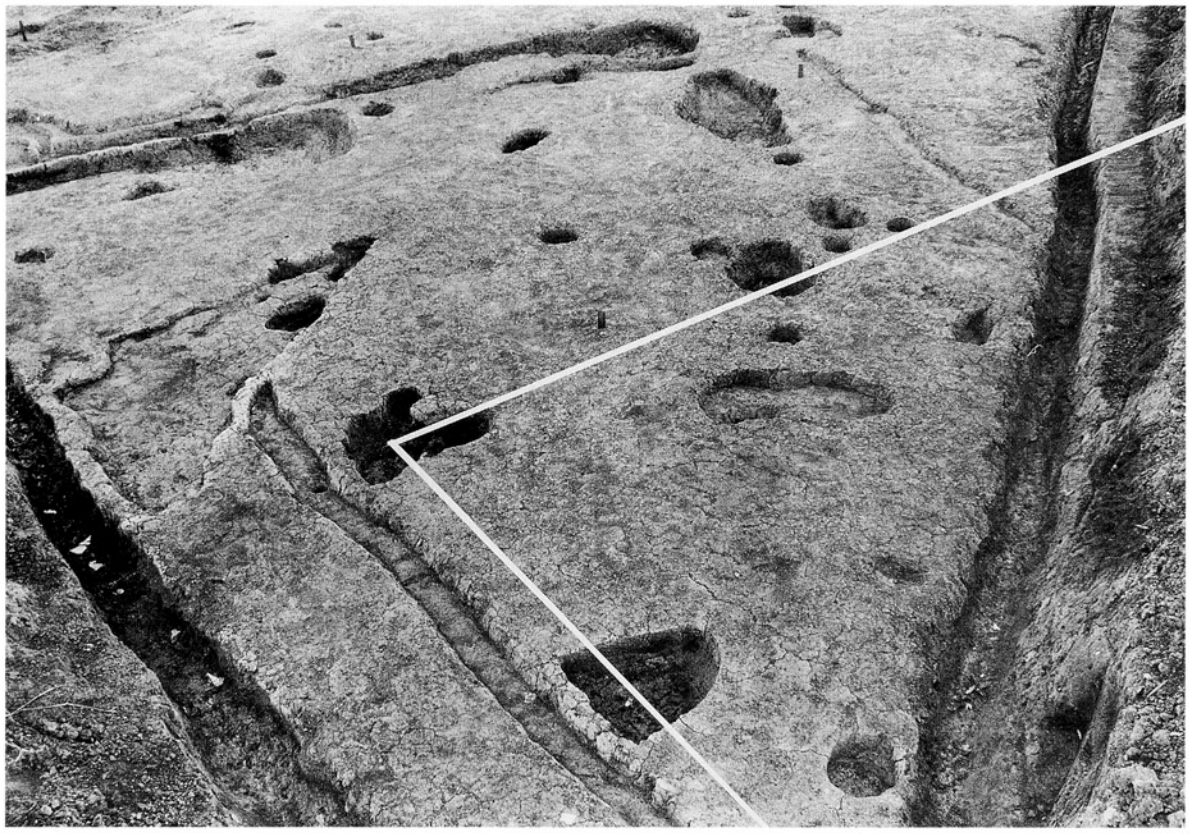
B地区　作業風景（東から）

ＳＥ３　掘削作業（北から）

A・B地区全景（南から）

C地区全景（南から）

図版 3



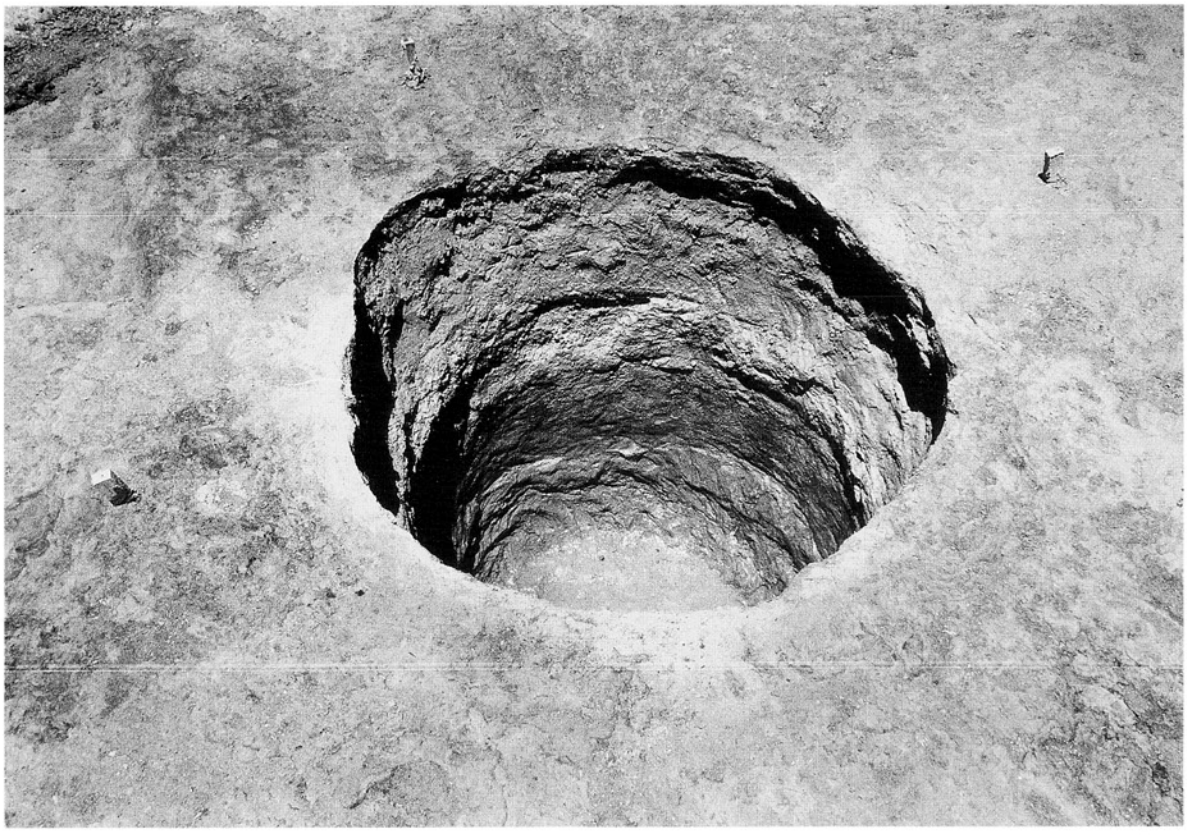
ＳＢ10（南東から）

ＳＤ１（南から）

ＳＤ53（西から）

ＳＥ３（南から）

図版 5

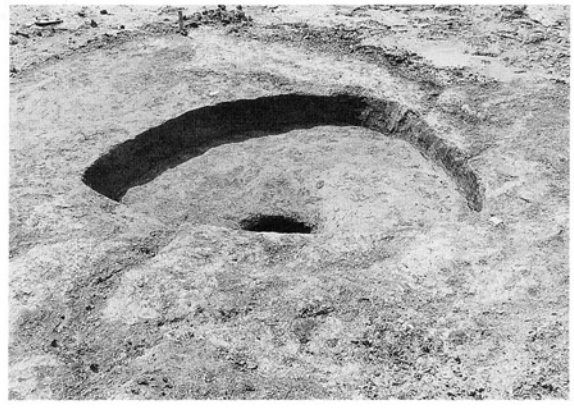


ＳＥ30（南から）

ＳＥ30　掘削作業（北から）

ＳＥ30　漆器出土状況（南から）

ＳＥ30　加工部材出土状況（南から）



ＳＥ52（西から）

23

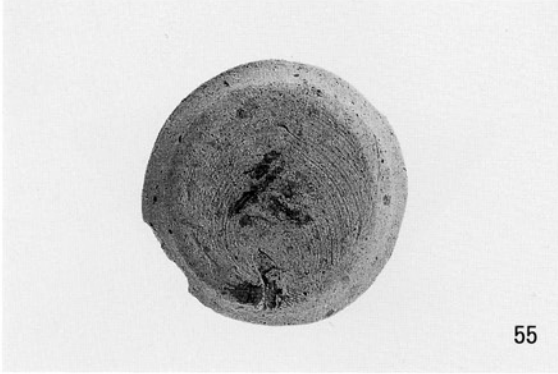
24

25

29

30

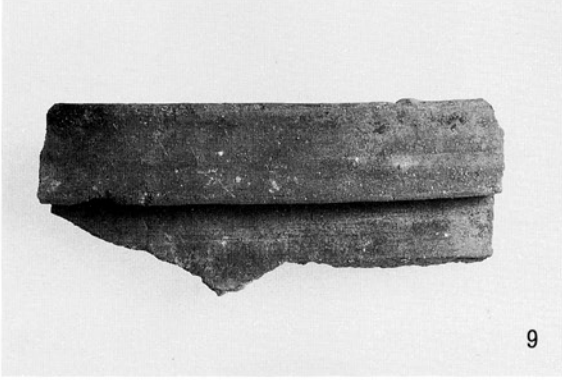
31

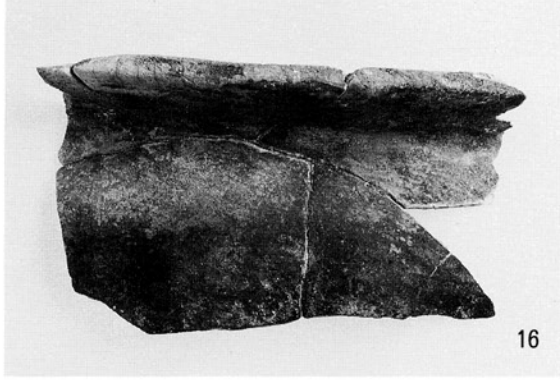

55

56

出土遺物 (1)　　墨 書 土 器

図版 7





出土遺物(2)

出土遺物(3)

図版 9

68

70

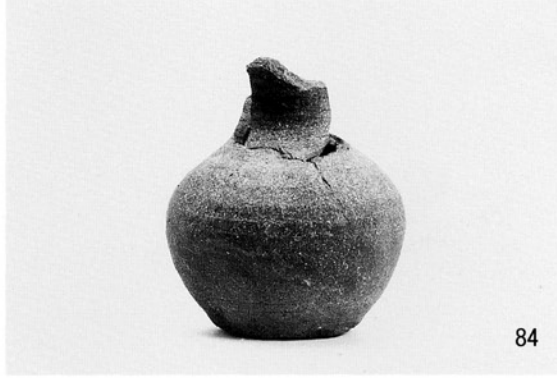
71

73

74

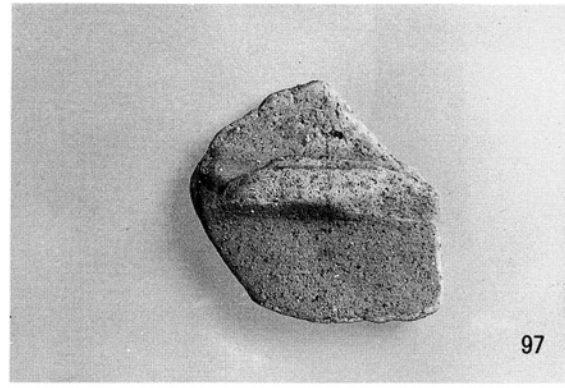
79

83

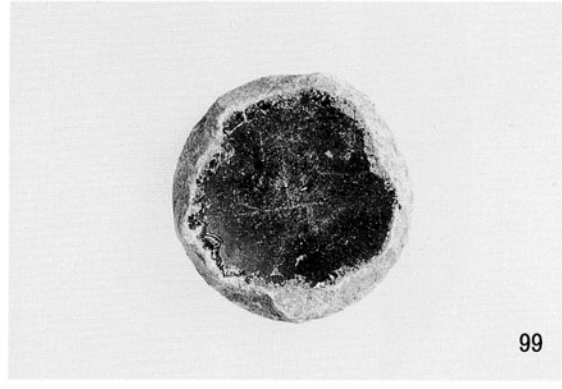

84

出土遺物(4)

96

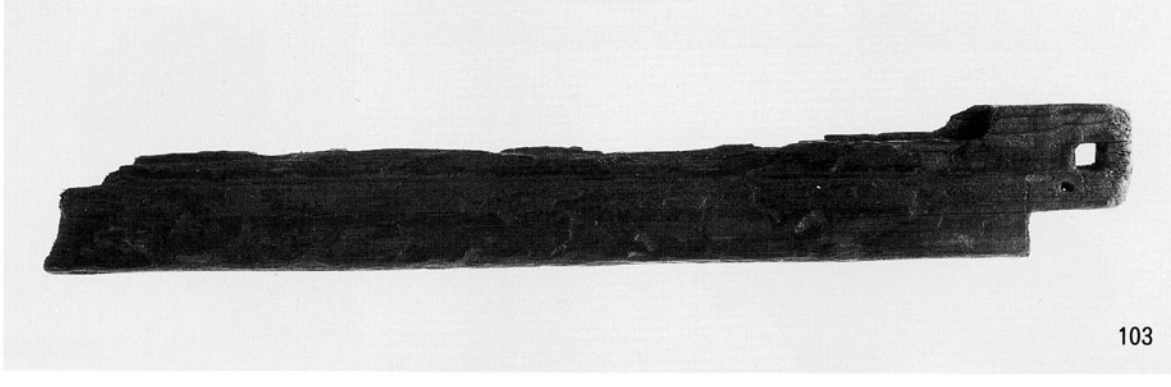

97

98


99

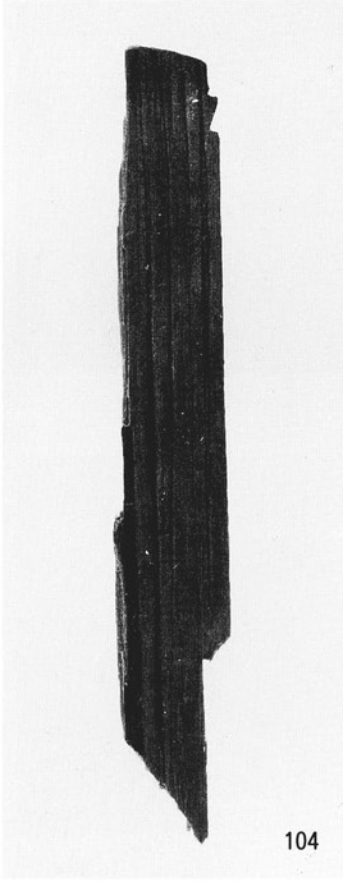
101

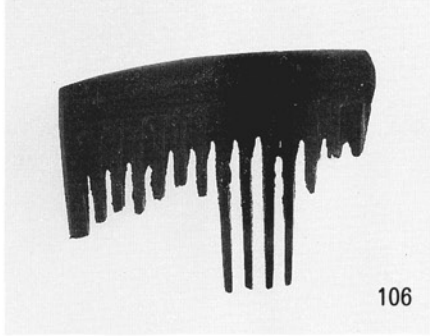
102


103

出土遺物(5)

図版11

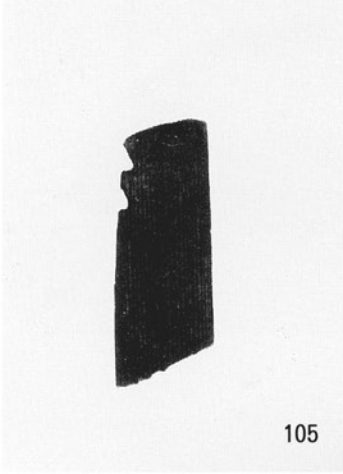

104

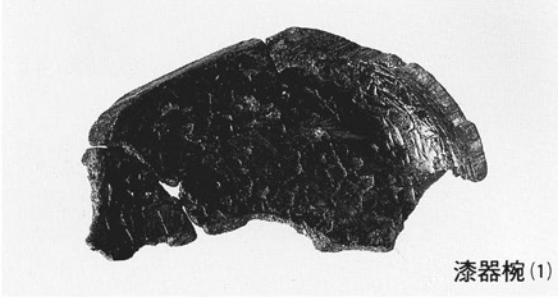

106

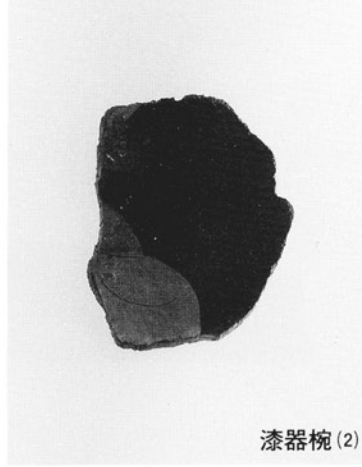
108

107

109


105


漆器椀(1)


漆器椀(2)

出土遺物(6)

報告書抄録

ふりがな	くぼたおおがいといせきだいにじはっくつちょうさほうこく
書名	窪田大垣内遺跡（第２次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１５０
編著者名	木野本　和之
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－０３　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 05965－2－1732
発行年月日	１９９７年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
窪田大垣内遺跡 （くぼたおおがいといせき）	三重県津市大里窪田町字池ノ下・平尾前 （みえけんつし おおざとくぼたちょう あざいけのした ひらおまえ）	24201	813	34° 45′ 50″	136° 29′ 31″	19960507 ～ 19960722	1,800	主要地方道津関線道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項
窪田大垣内遺跡	集落跡	奈良時代～中世	掘立柱建物・溝・井戸・土坑	土師器皿・杯・甕・鍋、須恵器杯・甕・壺、陶器、瓦片木製品（下駄・櫛・箸）漆製品（椀）	

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年7月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　150

窪田大垣内遺跡(第2次)発掘調査報告

―津市大里窪田町所在―

1997年3月31日

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　光出版印刷株式会社